

社 会 科 教 室

第 168 号

平成 3 0 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

大学入試共通テストから

グローバル化の進展や人工知能をはじめとする技術革新などに伴い、社会構造も急速に、かつ大きく変化している中、予見の困難な時代の中で新たな価値を創造していく力を育てることが求められています。そのためには、『学力の3要素』（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力）の育成とともに、こうした学力をきちんと評価することが重要です。

そこで国においては、高等学校教育と大学教育、そして両者を接続する大学入学者選抜を一体的に改革するため、2020年度から「大学入試共通テスト」が導入されることとなりました。この共通テストは、「知識・技能」だけでなく、大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を一層重視するという考えがベースにあるといわれており、記述式の問題の導入やマークシート式問題の見直しが検討されています。

そして、平成30年11月に、試行調査（プレテスト）が実施されました。日本史では、「史資料から何が読み取れるか」がより重視された出題、根拠をもって論理的に考える出題、正解が一つではない問題が出題されており、例えば、開発・災害と人々との関係を問う問題では、同じ時代を「開発と人々との関係史」「災害と人々の関係史」という2つの主題でとらえ歴史的事象の影響の多面性を考察する問題が出題されています。

さて、2020年度からの新学習指導要領全面実施に向け、今年度・来年度は移行期となっています。各学校においては、「主体的対話的で深い学び」を目指す授業改善、「教科等横断的な学習」の充実を図るカリキュラムマネジメント等に取り組まれていることと存じます。

現在の高校1年生からは、前述の新共通テストを受験するわけですから、そういう意味でも、子どもたちに未来を切り拓く資質・能力をしっかりと身につけさせることが大切であり、私たちの責任は非常に重いと思います。

今年度、社会科部会では、研究主題を「現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習～『社会に開かれた教育課程』の中での社会科を、教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～」と設定し研究に取り組んでまいりました。

大きな行事としては、7月27日（金）に、観音寺市民会館（ハイスタッフホール）において、三・観支部担当による夏季研修会が開催されました。そして、10月25日（木）に、まんのう町立満濃南小学校において、県下から240名の参加を得て香小研大会が盛大に開催されました。研究主題「人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学習の展開」のもと、研究発表及び4本の授業公開がなされ、大きな成果を上げることができました。

また、学習指導要領が改訂され、平成28年度全小社香川大会を記念して、前文部科学省視学官 国士舘大学教授 澤井 陽介 先生に序文を書いていただき、研究図書『社会に開かれた教育課程』による2タイプの社会科学習』を刊行することができました。各郡市から出されたすぐれた実践が多く掲載されています。

その他、定例研修会、基礎・テストの編集、夏のフィールドワーク、研究フォーラム等、いろいろな事業に取り組みました。これらの取組を通して、各支部が切磋琢磨しながら研究を深めるとともに、社会科を愛する仲間としての絆が一層強まったと感じています。

結びに、平成30年度の本会の研究活動に対して、ご指導、ご鞭撻を賜りました教育委員会、先輩の先生方、関係各位に深く感謝申し上げます。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科研究会
（部）会長 亀井 伸治

事業報告



平成 30 年度 事業報告

【定例研修会】

○ 仲・善社研定例会

月 日：6月9日(土) 9:25～11:40

場 所：善通寺市立筆岡小学校

第6学年「今に伝わる室町文化-金閣，銀閣を通して-」

授業提案者：尾崎 純一 先生（善通寺市立筆岡小学校 教諭）

指導者：林 聖士 先生（西部教育事務所 主任指導主事）

○ 坂綾社研定例会

月 日：6月23日(土) 9:30～ 11:30

場 所：坂出市立坂出小学校

第3学年「わたしたちのまち みんなのまち-坂出市の様子-」

提案者：藤島 太一 先生（坂出市立坂出小学校教諭）

：網野 未来 先生（綾川町立昭和小学校教諭）

指導者：林 聖士 先生（西部教育事務所主任指導主事）

○ 高松社研定例会

月 日：9月1日(土) 9:30～ 11:30

場 所：香川大学教育学部附属高松小学校ランチルーム

第4学年「地域の安全を守る消防署のはたらき」

提案者：鶴羽 美緒 先生（高松市立十河小学校）

：藤澤 大地 先生（高松市立十河小学校）

：高野 雅信 先生（高松市立十河小学校）

：妻鹿 恭介 先生（高松市立十河小学校）

指導者：河田 祥司 先生（高松市総合教育センター指導主事）

○ 丸亀社研定例会

日 時：9月29日(土) 9:30～ 11:30

場 所：丸亀市立城東小学校

第4学年「住みよいくらしをつくる」（水はどこから ～ ごみのしゅりと利用）

提案者：小山 沙織 先生（丸亀市立飯山北小学校）

：小西 崇夫 先生（丸亀市立城乾小学校）

指導者：河田 祥司 先生（高松市総合教育センター指導主事）

○ 高松社研定例会

日 時：10月6日(土) 9:30～ 11:30

場 所：香川大学教育学部附属高松小学校ランチルーム

第4学年 住みよいくらしをつくる（自然災害からくらしを守る）

提案者：藤澤 大地 先生（高松市立十河小学校）

：高木 浩彰 先生（高松市立国分寺南部小学校）

：中西 清美 先生（高松市立高松第一小学校）

指導者：河田 祥司 先生（高松市総合教育センター指導主事）

○ さ・東，小豆社研定例会

日 時：11月10日(土) 9:30～ 11:30

場 所：香川大学教育学部附属高松小学校ランチルーム

第4学年 「水はどこから」

提案者：山下 雄基 先生（さぬき市立志度小学校）

第6学年「三人の武将」と「日本の近代化への歩み」 ～討論型学習の推進～

：上嶋 光晴 先生（土庄町立土庄小学校）

指導者：亀井 健男 先生（さぬき市立さぬき北小学校）

平成30年度 夏季研修会報告

【日程】

平成30年 7月27日(金) 9:30 ~ 16:25 会場 観音寺市ハイスタッフホール

9:00	9:30	9:45	10:40	10:50	12:10	13:10	14:30	14:45	15:00	16:10	16:25
受付	開会行事	提案発表	移動 休憩	分科会Ⅰ 三観支部による提案	昼食	分科会Ⅱ 各支部による提案	移動 休憩	提案発表 満濃南小	指導・講評	閉会行事	

【開会行事】 9:30~9:45

挨拶

香川県小学校教育研究会社会科部会 部会長 亀井 伸治

来賓挨拶

香川県教育委員会事務局義務教育課 主任指導主事 三野 健

観音寺市教育委員会 教育長 三野 正

【提案発表】 9:45~10:40

社会科部会提案

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習
～「社会に開かれた教育課程」の中で社会科を、教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～

香川大学教育学部附属高松小学校 教諭 黒田 拓志

三観支部提案

『今』を見つめ、『未来』を拓く社会科学習の創造
—基礎的・基本的内容を身に付け、自ら問いを追究する社会科学習の創造—

三豊市立詫間小学校 教諭 片山 大輔

【分科会Ⅰ】 10:50~12:10

10:50	11:10	11:45	12:05	12:10
提 案 (20分)	討 議 (35分)	指 導 (20分)	総括(5分)	分科会責任者

分科会	単元名	提案者	協力者	指導・助言者	会場責任者
第3学年	工場の仕事 ～路地裏発! 地域と消費者をつなぐ商品開発～	観音寺市立 観音寺小学校 教諭 堀 友博	守屋 顕(観・伊吹小) 國土 英二(三・上高野小) 大井 浩二(観・観音寺小) 浪越 由記(三・詫間小)	香川県教育委員会事務局 西部教育事務所 主任指導主事 林 聖士	三豊市立 麻小学校 校長 萬亀 弘吉
第4学年	特色ある地域と人々の暮らし ～こびら歌舞伎を活かしたまちづくり～	観音寺市立 常磐小学校 教諭 白川 康太	高橋 史弥(観・高室小) 綾 敬太(観・豊浜小) 佐藤 優人(三・上高野小) 池田 葉月(三・笠田小)	琴平町教育委員会 生涯教育課 主任指導主事 渡部 岳史	三豊市立 上高野小学校 校長 安藤 通
第5学年	工業生産を支える ～日本の工業を支える中小工場～	観音寺市立 大野原小学校 教諭 大平 晃司	平口 真章(観・大野原小) 岩橋 秀司(三・曾保小) 大平理茶子(観・豊浜小) 片岡由起子(三・下高瀬小)	まんのう町立 満濃南小学校 教頭 佐柳 仁	観音寺市立 柞田小学校 校長 白杵 優
第6学年	世界に歩み出した日本 ～伊藤博文が描いた日本の姿～	観音寺市立 観音寺小学校 教諭 古子 貴将	篠原 一也(三・比地小) 眞鍋ももこ(三・麻小) 石川 千紗(観・観音寺小) 矢野 勝裕(三・勝間小)	香川県教育委員会事務局 義務教育課 主任指導主事 三野 健	三豊市立 詫間小学校 校長 福岡 和信

【昼食・移動】 12:10~13:10

【分科会Ⅱ】 13:10～14:30

13:10		13:30		14:05		14:25	14:30
提 案 (20分)		討 議 (35分)		指 導 (20分)		総括(5分) 分科会責任者	
分科会	学年	単元名	提案者	協力者	指導者	分科会責任者	
① 小豆	4年	住みよいくらしをつくる ～水はどこから～	小豆島町立 池田小学校 教諭 佐藤 忠相	平林 泰徳(小・土庄小) 上嶋 光晴(小・土庄小) 三枝 久美(小・安田小) 阪倉 順子(小・星城小)	香川大学教育学部 教授 伊藤 裕康	小豆島町立 星城小学校 校長 羽座 則史	
② さ・東	3年	市の様子	さぬき市立 さぬき北小学校 教諭 梅本 明宏	正木 優子(東・引田小) 六車 浩(東・白鳥小) 和田 千幸(さ・長尾小) 山下 雄基(さ・志度小)	丸亀市立飯山北小学校 教頭 福家 光洋	東かがわ市立 福栄小学校 校長 橋本 義人	
③ 高松 (北)	4年	ごみのしよりと利用 ～産業廃棄物から見る 法やきまり～	高松市立 林小学校 教諭 木戸 隆也	池田 康輔(高・栗林小) 中筋 修(高・太田小) 小松 裕貴(高・亀阜小) 黒川 幸宣(高・牟礼小)	琴平町立象郷小学校 教頭 山内 秀則	高松市立 庵治小学校 校長 岩崎 正敏	
④ 坂・綾	3年	みんなのまち わたしたちのまち ～坂出市の様子～	坂出市立 坂出小学校 教諭 藤島 太一	網野 未来(綾・昭和 small) 河野 富男(綾・宇多津小) 國友 良純(坂・府中小) 後藤 亮(綾・昭和 small)	高松市立十河小学校 教頭 大嶋 和彦	坂出市立 松山小学校 校長 白川 豊浩	
⑤ 丸亀	4年	ごみのしよりと利用	丸亀市立 郡家小学校 教諭 櫻井 道芳	栗山 直人(丸・城南小) 小山 沙織(丸・飯山北小) 増井 泰弘(丸・郡家小) 和田 早苗(丸・郡家小)	高松市総合教育センター 指導主事 河田 祥司	丸亀市立 城東小学校 校長 樋口 昌樹	
⑥ 仲善	5年	米づくりのさかんな地域	普通寺市立 東部小学校 教諭 小野 祐太	大木 陽平(善・西部小) 竹森 仁志(仲・琴平小) 乗松 直樹(仲・満濃南小) 吉原 彬宏(善・筆岡小)	観音寺市立大野原小学校 教頭 合田 雅気	琴平町立 琴平小学校 校長 岩崎 保雄	
⑦ 高松 (南)	6年	わたしたちの生活と政治 ～電子黒板導入の過程を 日本国憲法とつなぐ～	高松市立 十河小学校 教諭 山下 悠	高木 浩彰(高・国分寺南部) 藤澤 大地(高・十河小) 黒川 浩一(高・大野小) 加藤 優(高・多肥小)	香川大学教育学部 教授 鈴木 正行	高松市立 川東小学校 校長 市原 茂幹	

【提案発表】 14:45 ～ 15:00

香小研大会に向けて

まんのう町立満濃南小学校

教 諭

乗松 直樹

【指導・講評】 15:00 ～ 16:10

指導・講評

文部科学省初等中等教育局教育課程課

教科調査官

小倉 勝登

【閉会行事】 16:10 ～ 16:25

三観支部挨拶

香川県小学校教育研究会 三観支部 社会科部会

部 会 長

萬亀 弘吉

副部会長挨拶

香川県小学校教育研究会 社会科部会

副 部 会 長

羽座 則史

【成果と課題】 参加人数 約225名

- 分科会Ⅰ・Ⅱともに、学習指導要領の改定期に相応しい、新しいチャレンジングな実践が多く、これら若い先生達による提案が今後への期待を高めた。
- 5年情報単元の「第3次産業と情報化される社会の内容のバランス」など新指導要領に示された新しい内容の課題が見えつつある時期なので、次回夏季研では、その課題を明らかにして、実践を募っていくことが望ましい。
- 各都市の特色は出しつつ、現代的な諸課題を教材化するための共通実践をする方が討議の論点を絞ることができるのではないか。

平成 30 年度 香社研フィールドワーク 活動報告

平成 30 年度、香社研フィールドワークは、「香川、再発見」をテーマに 1 泊 2 日で香川県の東讃地区を回りました。香川県内での活動だったため、移動時間が短く、一つ一つの見学地にたっぷり時間をとることができました。

1 日目は、庵治石を加工する工場、四国唯一のワイン工場、平成 16 年の土砂災害対策によってつくられた砂防ダム、手袋工場を訪れました。2 日目は、和三盆をつくる工場で昔ながらの製法に触れ、港町として栄えた引田の街並みを散策し、屋嶋城の大きさを体験することができました。これら、7 つの見学地すべてで、現地の方の話を聞くことで、より理解を深め、疑問についても聞くことができました。

1 目 的

- ①体験・見学を通して、教材研究を深める。
- ②教科、世代を問わず香社研や教員同士の親睦を深める。

2 日 程 : 平成 30 年 8 月 18～19 日 (土～日)

貸し切りバスでの移動

一 日 目	8/18 (土)	坂出駅＝高松駅＝＝＝(株)オールストーン＝＝＝さぬきワイナリー＝＝＝ 昼食 ＝＝					
		8:00	8:400	9:30	10:30	11:00	11:40 12:10～13:10
二 日 目	8/19 (日)	＝＝砂防ダム＝＝＝(株)ダイコープロダクト＝＝＝懇親会 (ホテルにて)					
		13:45	15:00	15:30	16:30	18:00～20:00	
		ホテル＝＝ 三谷製糖 ＝＝＝讃州井筒屋敷——引田の街並み散策＝＝＝ 昼食 ＝＝					
		8:30	9:00	10:00	10:10	11:40	11:40～12:40
		＝屋嶋城 (散策) ＝＝＝＝高松駅＝坂出駅					
		13:40	15:10	15:40	16:20		

3 参加人数 : 24 名

4 各スポット

(1) 8 月 18 日 (土)

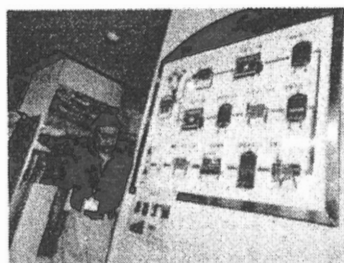
(株)オールストーン



オールストーンにて庵治石の説明を聞きました。同じように見える庵治石でもよく見ると違いがあり、美しく感じる秘密を知ることができました。

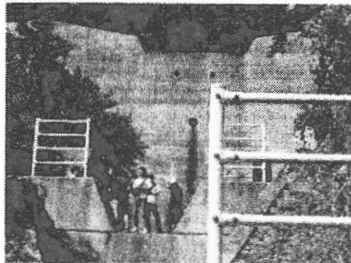
少ししかとることができない高級庵治石を、細心の注意と長年培われた技術を使って、より美しく加工することで、長く愛される石材を作っていることが分かりました。

さぬきワイナリー



四国唯一のワイン工場である、さぬきワイナリーでは、ワインの製法について説明を受けました。地元の材料を大切にしていること、原料としてブドウだけでなく、様々な果実を使ってワインを作ろうと研究を重ねていることを知り、地元を大事にしつつ研究を怠らない姿勢に共感を覚えました。一方で、ワイナリーができた 30 年前にはあった近くのブドウ生産がなくなり、現在は多度津から運ばれていることも知ることができました。

砂防ダム



平成 23 年に起きた土砂災害を受けて建設された砂防ダムです。このようにハード面での災害対策は香川県でも行われています。それでも被害が発生してしまうのはなぜでしょうか。それは、我々の意識の問題でした。土砂災害が起こりそうな土地に住居を作らないのはもちろん、災害が起こりそうなときには、非難する防災意識をもつことの大切さに気付かされました。そのためにも、防災教育に取り組んでいきたいものです。

(株)ダイコープロダクト



生産量が多いにもかかわらず、あまり知られていない香川県の手袋産業。自社ブランドがないことが原因の一つと説明を受けました。そこで、自社ブランドを立ち上げたこと、従業員のために工場を建て替え、よい仕事環境を作り、働き方改革を進めていることなど、手袋産業を守ろうとする努力を感じることができました。

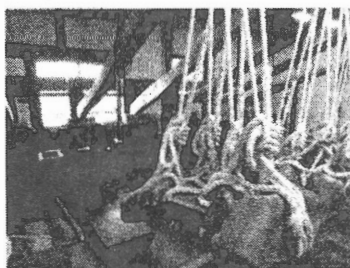
懇親会

参加して下さった皆様といろいろな話ができた懇親会となりました。初参加の人、何度も参加している人、社会科以外の人、様々な立場の人のお話が聞ける貴重な時間でした。

(2) 8月19日(日)

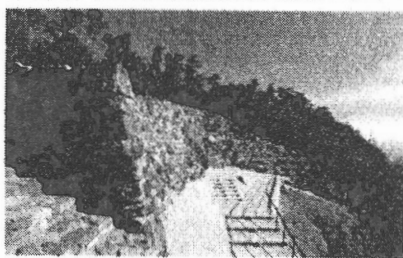


三谷製糖～讃州井筒屋敷～引田の町並み



いまだ昔ながらの製法で和三盆糖を作り続けている三谷製糖では、伝統的な製法について話を聞くことができました。絞っている途中の蜜は甘かったです。その後、昔の引田の豪商の家を訪ね、案内の方の説明によってさりげない豪華さにあることに気付くことができました。昔ながらの町並みを歩くと、かつてのにぎわいを感じられると同時に、その町並みをうまく生かしながら観光を呼び込む工夫に感心しました。

よみがえる古代城～屋嶋城～



近年の発掘調査によってその全貌が明らかになりつつある古代城「屋嶋城」。案内の方の説明を受けながら山を歩き、かつて城門があったとされるエリアにたどり着いたとき、その雄大さに圧倒されました。

観光にも力が入っており、iPadによるAR体験ができ、過去と未来を同時に体験しました。雄大な山城を前に、かつての瀬戸内地方に思いをはせました。



5 旅を終えて

本年度のフィールドワークもたくさんの人が参加して下さいました。改めて香川県を回ってみると、知っているようで知らないことがたくさんあることに気付かされます。また、地元の人や企業の人とはとても協力的で、それぞれの見学地でその心遣いに感動しました。

終始楽しい時間を過ごすことができたのは、フィールドワーク委員の先生方、そして、参加して下さった先生方のおかげです。ありがとうございました。次年度は、香川県の中・西讃地区を回る予定です。魅力あるフィールドワークにしていきたいと思います。どうぞお楽しみにしてください。

全国大会（埼玉大会）参加報告

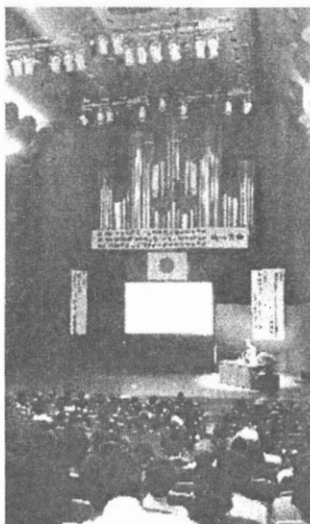
第56回 全国小学校社会科研究協議会研究大会埼玉大会

平成30年10月25日（木）・26日（金） 全体会：川口総合文化センター リリア

第1会場：川口市立本町小学校 第2会場：川口市立戸塚北小学校 第3会場：川口市立鳩ヶ谷小学校

1日目 全体会

- ・開会行事
- ・指導講評
- ・記念講演



2日目 会場別

- ・公開授業
- ・学年別課題研究会



◇指導講評 教科調査官 小倉 勝登 先生

3つの視点で授業改善を描く「問い」「学び合い」「振り返り」

子どもたちが見通しをもち、社会的事象の見方・考え方を働かせるための問いは重要である。子どもの「問い」になるように思考の流れを意識しなければならない。子どもたちが多様な視点を身に付け、多角的に社会事象の意味を捉えられるような交流活動や学び合いが単元に位置付けられるべきである。最後に、「振り返り」は、学びを「まとめること」と「振り返ること」を分けて、その有効性を確かめていきたい。

◇記念講演 国士舘大学 澤井 陽介先生

授業の見方 ～自分自身の授業改善を図る～

○「指導案・単元構成」からみる

問題解決の道筋がずれていないか。

答え探しになっていないか。

○「問い」からみる

子どもたちがつくった問いか、問いが子どもたちに落ちているか。

○「まとめ」からみる

まとめは子どもがまとめているか。目標を実現したものか。子どもたちが、自分たちで問題解決できたか。

学習課題とまとめの整合性があるか。子どもの言葉で想定しているか。



◇公開授業 川口市立鳩ヶ谷小学校

埼玉大会では、全3会場が1・2年生の生活科、3～6年生の社会科を公開した。社会科では、全学年で4本の公開授業を行っていた。同じ単元の第1次、第2次、第3次、第4次の各段階の授業を同時公開することで、単元の流れが参観者にも分かるように工夫されていた。また、鳩ヶ谷小学校では、子どもたちの思考が深まったり、追求意欲が継続したりするように、社会認識をもつ段階と、新たな問いを追究する段階に分ける、2ステップの学びの過程を提案していた。

◇学年別課題研究会

課題研究会では、さぬき・東かがわ社研の山崎先生が実践発表を行った。山下先生の実践「水はどこから」をもとに、「子どもが問いをつくり、深め、広げる単元構成」、「若手とベテランで進める研究の継承と発展」の具体を発表した。参会者からは、問いの成立過程について、香川県の水事情に関する質問があった。また、再構成の学習論について、抱き合わせの福岡県の論に、再構成の学習論が用いられており、論の相違点について議論が深まった。

提案者 さぬき市立石田小学校 山崎 悠 先生
協力者 さぬき市立志度小学校 山下 雄基先生
協力者 東かがわ市立三本松小学校 白澤 一修先生
指導者 東かがわ市立福栄小学校 橋本 義人校長



平成 30 年 7 月吉日

各県教育委員会教育長 様
各市町村教育委員会教育長 様
各 小 中 学 校 校 長 様
関 係 各 位

第42回 四国社会科教育研究大会

徳島大会実行委員長 上 田 康 裕

第42回 四国社会科教育研究大会 徳島大会のご案内 〈第2次案内〉

盛夏の候、皆様方におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、この度、第42回四国社会科教育研究大会徳島大会を徳島市で開催いたします。新学習指導要領が告示され、社会的事象に対する見方・考え方を働かせて、学びを深めることが示されました。社会に見られる課題を把握して、その解決に向けた広い視点からの考えを交流し合う中で、選択・判断できる力を培うとともに、より深い社会認識を獲得できるようにすることが求められています。いわば、これからの社会科は「社会に対する認識と判断」の両面をいかにすれば育むことができるのかが問われていると考えます。このことについて、四国四県の先生方とともに考えてまいりたいと思います。

つきましては、本県の研究に対するご批正を賜りますとともに、相互の交流を深め、共に社会科教育の発展を図りたいと考えておりますので、多数の皆様には是非ご参加いただきたくご案内申し上げます。

主 催 四 国 社 会 科 教 育 協 議 会 徳 島 県 小 学 校 社 会 科 教 育 研 究 会

共 催 徳島県小学校教育研究会社会部会 徳島市・名東郡小学校教育研究会社会部会

後 援 徳 島 県 教 育 委 員 会 高 知 県 教 育 委 員 会

愛 媛 県 教 育 委 員 会 香 川 県 教 育 委 員 会

徳島県市町村教育委員会連合会 徳 島 県 小 学 校 校 長 会

公益社団法人徳島県教育会 一般財団法人徳島県教職員互助組合

公益財団法人日本教育公務員弘済会徳島支部

徳 島 市 教 育 委 員 会 佐 那 河 内 村 教 育 委 員 会

大会要項

1 大会主題

よりよい社会の形成に参画する資質・能力を育てる授業の創造
 ー見方・考え方を働かせて、社会に対する認識と判断する力を育む社会科学学習ー

2 期 日 平成 30 年 11 月 16 日(金)

3 会 場 徳島市大松小学校
 〒770-8022 徳島市大松町上野神 9 番地
 TEL : 088-669-0814 FAX : 088-669-0849

4 日 程

9:00 9:30 10:00 10:10 10:55 11:10 12:10 13:00 16:00

受 付	基調提案	休 憩	公開授業	移 動	分科会	昼食	全 体 会				
							開会 行事	指導 講評	休憩	記念 講演	閉会 行事

5 基調提案 徳島県の提案 徳島県小学校社会科教育研究会 研究部長
 鳴門教育大学附属小学校 教諭 佐藤 章浩
 会場校の提案 徳島市大松小学校 指導教諭 西山あけみ

6 講 評 国士舘大学 体育学部 こどもスポーツ教育学科 教授 澤井 陽介 先生

7 記念講演

演題 「神山プロジェクトー地域に誇りをもち、創造力豊かな子どもの育成ー」

講師 NPO法人グリーンバレー理事 大南 信也 先生

◇プロフィール

1953年徳島県神山町生まれ。米国スタンフォード大学院修了。
 帰郷後、仲間とともに「住民主導のまちづくり」を実践する中、1996年ころより「国際芸術家村づくり」に着手。
 全国初となる道路清掃活動「アドプト・プログラム」の実施や、「神山アーティスト・イン・レジデンス」などのア
 ートプロジェクトを相次いで始動。町営施設の指定管理や、町移住交流支援センターの受託運営など複合的、複
 層的な地域づくりを推進。現在、多様性あふれる人が集う創造地域「せかいのかみやまづくり」を目指し活動中。
 (引用：総務省「地域人材ネット」)

【公開授業】

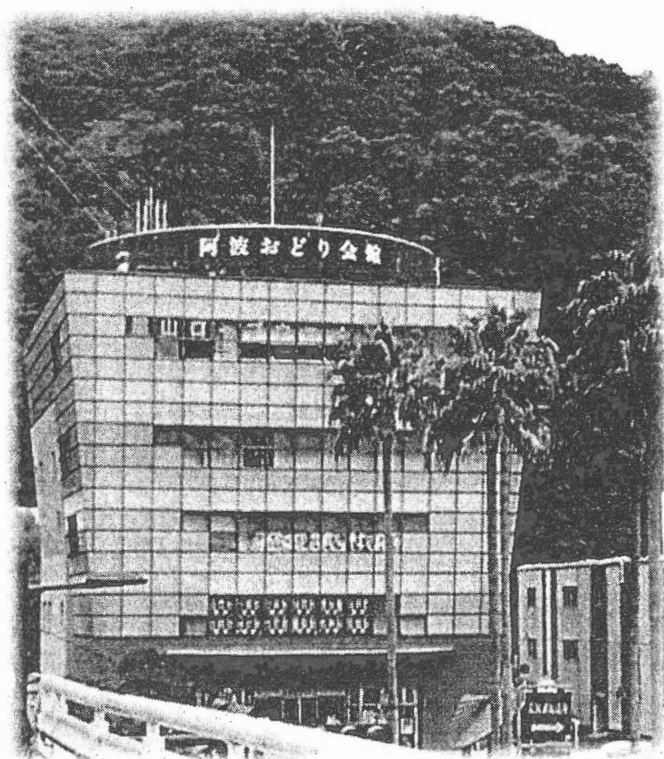
学年学級	単 元 名	授 業 者
3 年 1 組	徳島市のうつり変わり	井関 美香
4 年 1 組	地震災害から人々を守るために	西山あけみ
5 年 2 組	わたしたちの生活を変える情報ネットワーク	元木 誠子
6 年 2 組	世界に歩み出した日本	中島賢一朗

【学年別分科会】

学年	指 導 助 言 者	司 会 者	代 表 質 問 者
3 年	高知県南国市立十市小学校 教頭 彼末 健一 小松島市立和田島小学校 校長 秋山 和雄	神山町立神領小学校 教頭 河上 正信	愛媛県松前町立岡田小学校 教諭 上田真之介
4 年	愛媛県松山市立坂本小学校 校長 田丸 耕造 徳島市沖洲小学校 校長 北島 潤	海陽町立海部小学校 教頭 岩浅 英夫	香川県丸亀市立城辰小学校 教諭 北分 英樹
5 年	香川県坂出市立松山小学校 校長 白川 豊浩 徳島県教育委員会学校教育課 指導主事 長江 徹子	東みよし町立昼間小学校 主幹教諭 木村 栄治	高知県南国市立大湊小学校 教諭 大澤 隆志
6 年	高知県高知市立鏡小学校 校長 小比賀 博 阿南市立山口小学校 校長 稲井 智義	上勝町立上勝小学校 教頭 森北 和典	愛媛県松山市立番町小学校 教諭 片岡 克哉

平成30年度

四国社会科教育協議会常任理事会



(阿波おどり会館)

日 時 平成30年11月16日(金)
12:20~12:50

場 所 徳島市大松小学校(音楽室)

平成30年度四国社会科教育連絡協議会常任理事会

1 日 時 平成30年11月16日(金) 12:20~12:50

2 日 程

- 四国社会科教育協議会会長あいさつ(上田会長)
- 出席者自己紹介 ○ 日程説明
- 協議・連絡

(1) 平成29年度会計報告 平成30年度予算案 徳島県

(2) 次回以降の開催予定について

年度	四国社会科教育研究大会	四国社会科教育協議会 常任理事会
30年度 (2018年)	第42回 徳島大会 ※第51回全中社研 徳島大会	徳島県
31年度 (2019年)		高知県
32年度 (2020年)	第43回 高知大会 第53回全中社研 高知大会	高知県
33年度 (2021年)		愛媛県
34年度 (2022年)	第44回 愛媛大会	愛媛県
35年度 (2023年)		香川県
36年度 (2024年)	第45回 香川大会	香川県
37年度 (2025年)		徳島県
38年度 (2026年)	第46回 徳島大会 ※第64回全小社研 徳島大会	徳島県
39年度 (2027年)		高知県
40年度 (2028年)	第47回 高知大会	高知県
41年度 (2029年)		香川県
42年度 (2030年)	第48回 香川大会 ※第68回全小社研 香川大会	香川県
43年度 (2031年)		愛媛県
44年度 (2032年)	第49回 愛媛大会 全小社研 愛媛大会	愛媛県
45年度 (2033年)		徳島県
46年度 (2034年)	第50回 徳島大会	徳島県

2032年 全中社 徳島大会

(※は、全国大会)

(2) 会則改正(案)について

(3) その他(各県からの連絡, 情報交換 他)

(4) 事務連絡

○ 次回開催県あいさつ(高知県)

※ 負担金の集金(事務局)

平成30年度四国社会科教育協議会常任理事会 参加者名簿

県名	役職名	勤務先	氏名	四国	理事会参加
徳島	徳島県小学校社会科教育研究会 会長	徳島市富田小学校 校長	上田 康裕	◎	○
	事務局長	鳴門教育大学附属小学校	中尾 梓		○
	事務局次長	鳴門教育大学附属小学校	佐藤 章浩		○
	事務局次長	吉野川市立飯尾敷地小学校	松永 宏		○
	事務局会計	板野町立板野東小学校	谷口 久美子		○
	徳島県中学校社会科教育研究会 会長	美馬市立江原中学校 校長	野々村 拓也	○	○
	事務局長	徳島市富田中学校	江東 克彦		○
高知	高知県社会科教育研究会小学校部 会長	高知市立昭和小学校 校長	伊藤 浩昭		○
	副会長	高知市立鏡小学校	小比賀 博		○
	事務局長	高知市立朝倉第二小学校	田村 隆吏		○
	事務局次長	高知大学教育学部附属小学校	沖 卓弥		○
愛媛	愛媛県教育研究協議会社会科委員会 副委員長	松山市立坂本小学校	田丸 耕造		○
	事務局長	愛媛大学教育学部附属小学校	檜垣 延久		○
香川	香川県小学校社会科教育研究会 会長	高松市立太田小学校 校長	亀井 伸治		○
	事務局長	香川大学教育学部附属高松小学校	黒田 拓志		○

※四国の欄は各県の◎は会長、○は副会長を表す

- 高知県の副会長は、大豊町立大豊町中学校 川崎 剛 校長先生
- 愛媛県の副会長は、東温市立川内中学校 渡部 浩美 校長先生
- 香川県の副会長は、高松市立庵治中学校 小西 一郎 校長先生

平成29年度 四国社会科教育協議会会計決算書

1 収入の部

科 目	平成29年度決算額	備 考
1 会費（負担金）	200,000	25,000円×8（各県小中学校）
2 繰越金	0	
3 雑収入	0	
合 計	200,000	

2 支出の部

科 目	平成29年度決算額	備 考
研究費	会議費	42,000 理事会会場費，食事補助等
	研究会費	0
印刷費	会議資料等	0 理事会等
	研究冊子等	0
	案内状等	0 1次案内印刷費等
事務費	事務用品	0 タックシール，封筒代等
	用紙等	0 用紙代
	通信費	0 郵送費等
他	大会準備費	0 紀要代等
合 計	42,000	

$$200,000 - 42,000 = 158,000$$

平成29年度残金158,000円は，大会準備費として繰り越します。

平成30年度 四国社会科教育協議会 会計予算書（案）

1 収入の部

科 目	30年度予算額	備 考
1 会費（負担金）	200,000	25,000円×8（各県小中学校）
2 繰越金	158,000	平成29年度繰越金
3 雑収入	0	
合 計	358,000	

2 支出の部

科 目	30年度予算額	備 考
研究費	会議費	5,000 理事会会場費，食事補助等
	研究会費	
印刷費	会議資料等	5,000 理事会等
	研究冊子等	0
	案内状等	18,000 2次案内印刷費等
事務費	事務用品	10,000 タックシール，封筒代等
	用紙等	10,000 用紙代
	通信費	10,000 郵送費等
他	大会準備費	300,000 要項・紀要代等
合 計	358,000	

四国社会科教育協議会（四国社会科教育連絡協議会）会則

平成19年4月1日

（名称）

第1条 本会は、四国社会科教育協議会（四国社会科教育連絡協議会）と称する。

（目的）

第2条 本会は、四国四県の小学校ならびに中学校社会科教育の振興を図るために、教育研究及び実践成果の交流等を行うことを目的とする。

（組織）

第3条 本会は、本会の目的に賛同する四国四県の小学校ならびに中学校社会科教育研究団体から選出された常任理事で構成する。

（事業）

第4条 本会は、次の事業を行う。

- 1 研究大会の準備及び打ち合わせ
- 2 四県の小学校・中学校社会科教育の情報交換及び交流
- 3 全国の社会科教育研究団体との情報交換及び交流
- 4 その他、本会の目的を達成するために必要な事業

（役員・選出）

第5条 本会には、次の役員を置き、会長・副会長は常任理事から選出する。

- 1 会長1名（大会県より選出）
- 2 副会長4名（各県より1名）
- 3 常任理事（各県小学校3名・中学校3名）
- 4 監事2名（大会県より会長が常任理事以外から委嘱する）

（役員の任務）

第6条 役員の任務は、次の通りとする。

- 1 会長は、会を代表し、会務を統括する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその任務を代行する。
- 3 常任理事は、本会の運営について協議し、決定する。
- 4 監事は、監査を司る。

（役員任期）

第7条

- 1 役員の任期は大会前年と大会の年の2カ年とし、4月1日から起算する。但し、再任を妨げない。
- 2 欠員等が生じた場合に補充された役員の任期は前任者の残任期間とする。

（会議）

第8条 大会の運営は常任理事会で決める。

- 1 常任理事会は、予算決定、決算の承認、役員の承認その他重要な会務の企画、運営について審議、決定する。
- 2 常任理事会は通常年1回の開催として、研究大会の当年度及び前年度に会長が招集する。但し、緊急に処理すべき事案があつて会長が必要とすると認めたときは、副会長の同意を得て、臨時会

を開くことができる。

3 議事は、出席常任理事の過半数で決し、可否同数の時は会長が決する。

(経費)

第9条 本会の経費は研究団体から拠出される毎年2万5千円の負担金をもって充てる。

(会計年度)

第10条 会計年度は4月1日より始まり、翌年の3月31日に終わる。

但し、大会県が本会を主催する2力年においては、年度を超えた繰越を認めるが、次期大会県に引き継ぐ際には、剰余金を残さないこととする。

第11条 決算は、監事の監査を受け、大会翌年度の常任理事会で承認を受けなければならない。

(事務局)

第12条 本会には、会長選出県に事務局を置き、事務局長・会計長および必要な事務局員を置く。

1 事務局長 1名 (大会県より選出)

2 会計長 1名 (大会県より選出)

3 書記その他若干名 (大会県より選出)

* 常任理事が事務局員を兼ねることができる。

(会則の改正)

第13条 本会の会則の改正は常任理事会で行う。

付則

本会則は、平成19年4月1日より実施する。

平成30年11月16日一部改正

平成30年度 社会科の基礎・テスト編集委員会【事業報告】

1 本年度の課題と年間計画

(1) 本年度の重点事項

○子どもにとって「力が伸びる、伸びが分かる」基礎・テスト。

基礎的な知識・理解、技能の習得と、それらを活用して解決する問題の作成。

○教職員にとって「本当に使える」基礎・テスト

2社の教科書に対応した指導要領準拠の問題作成。（新指導要領を見据えた問題）
分かりやすい解答表記、使いやすい教科書対応ページ表記などの工夫。

○社会科の基礎のページ数の削減と答えの添付

「授業では考える力を、基礎では基礎的な知識・理解、技能の習得を」という目的を明確にし、大幅な基礎の改訂を行った。授業時間を確保するために問題の精選を行い、ページ数を8ページ削減し、答えを添付することにした。家庭学習で子どもたち自身が丸付けを行うといった活用方法もできるようにした。

(2) 年間計画等

今年度、年5回（前期版・後期版）の編集会議。

年 月 作 成 予 定	平成30年										平成31年		
	4	5	6	7	8	9	10	11	12		1	2	3
		①	②	③									
		H31前期版作成											
				①		②	③						
				H31後期版作成									

【年間計画】

	回	日 時	内 容	備 考
三十一年度 前期作成	①	5 / 12 (土) 9:30~11:30	担当決め	
	②	6 / 9 (土) 9:30~11:30	協議・作成	
	③	7 / 14 (土) 13:30~15:30	最終の話し合い	■ 会終了後、30年度後期版担当決めを行う。
	提出	7 / 27 (金) 8 / 17 (金)	世話役必着 事務局水口必着	
三十一年度 後期作成	①	7 / 14 (土) 13:30~15:30	担当決め	
	②	9 / 29 (土) 13:30~15:30	協議・作成	
	③	10 / 6 (土) 13:30~15:30	最終の話し合い	■ 交通費、執筆費受領(5回分) (受領印を持参)
	提出	11 / 2 (金) 11 / 19 (月)	世話役必着 事務局水口必着	

編集作業では、次のように役割分担し、下記の計画にそって行った。

【役割分担】

■指導、編集責任者	・・・教頭先生
■世話役（司会、原稿取りまとめ、添削等）	・・・1名
■編集者	・・・残りの先生方
■編集補助【事務、研究】	・・・事務局6名

(3) 31年度版作成に向けて

・移行措置対応…5年（現行基礎・テストを活用して対応可能）

3年（内容の組み換えが必要 31年度版作成時に配慮）

※参考資料（教育出版HPより）

移行措置期間中の教科書・教師用指導書の扱い

移行措置を行う年度	学 年	移行措置の内容	移行措置期間中の教科書・教師用指導書の扱い
平成30年度 平成31年度	第5学年	「我が国の領土の範囲」 の学習に関わる内容を 一部追加	現行版の教科書（5上10～13ページ）を使って学習することができます。 参考：学習指導要領「内容の取扱い」 「領土の範囲」については、竹島や北方領土、尖閣諸島が我が国の固有の領土であることに触れること。
平成31年度	第3学年	「地域の安全を守る働き」 を第3学年で学習	現行版の教師用指導書に掲載の学習指導案（『授業編』3・4下4～29、36～37ページ『研究編』3・4下70～77、84～88、92ページ）をもとに、現行版の地域副読本などを使って学習することができます。 ※関連して、「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」（現行版の教科書3・4上98～105、118～119ページに当たる内容）については、学習を行わないこととなります。

※31年度年間計画例

学期	月	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	月
1学期	4月	1 わたしたちの大好きなまち オリエンテーション 1 わたしの住むまちはどんなまち	4 会合なくもしとまちづくり オリエンテーション 1 事故・事件のないまちを目指して	1 わたしたちのくらしと国土 オリエンテーション 1 日本は世界のどこにある？ 2 日本の地形と気候	1 日本の歴史 オリエンテーション 1 国づくりへの歩み	4月
	5月		2 災害からまちを守るために	3 自然条件と人々のくらし 深める	2 木造に学んだ国づくり 深める	5月
	6月	2 わたしたちの市の様子	5 会合なくもしとまちづくり オリエンテーション 1 ごみはどこへ	2 会合なくもしとまちづくり オリエンテーション 1 まちづくりのさかんな地域	3 武士の政治が始まる	6月
	7月	3 働く人とわたしたちのくらし オリエンテーション 1 店で働く人と仕事		2 水産まのさかんな地域	4 今も受けつがれる室町文化 5 全国統一への動き	7月
2学期	8月		2 水はどこから 深める	3 これからの食料生産 深める	6 幕府の政治と人々の暮らし 7 新しい文化と学問	8月
	9月			5 工業生産を支える人々 オリエンテーション 1 自動車づくりにはげむ人々	8 新しい時代の幕あけ 9 近代国家に向けて	9月
	10月	2 工場で働く人と仕事 深める	6 会合なくもしとまちづくり オリエンテーション 1 西田新田はどこにあった 2 西田新田はどうやってできた		10 戦争と人々の暮らし	10月
	11月	3 変わるわたしたちの暮らし 2 昔の道具とくらし	7 わたしたちの家のまちづくり オリエンテーション	2 世界とつながる日本の工業 3 工業の今と未来	11 平和で豊かな暮らしを目指して 深める	11月
3学期	12月		1 風の地図を広げて	4 くらしを支える情報 オリエンテーション 1 情報を使える人々	2 暮らしの中の感動 オリエンテーション 1 わたしたちの暮らしを支える取組	12月
	1月	4 会合なくもしとまちづくり オリエンテーション 1 事故・事件のないまちを目指して	2 橋を築き生かしたまちづくり	2 広がる情報ネットワーク 3 情報を生かすわたしたち 深める	2 憲法とわたしたちの暮らし 深める	1月
	2月	2 災害からまちを守るために	3 昔のよさを未来に伝えるまちづくり	5 国土の自然とともに生きる オリエンテーション 1 森林を守る人々 2 自然災害とともに生きる	3 世界の中の日本 オリエンテーション 1 日本とつながりの深い国々	2月
	3月	3 深める	4 世界とつながる植民地 まとめ	3 生活環境を守る人々 深める	2 世界の人々とともに生きる 深める	3月
総時数		70	80	100	105	

- ・第3学年3学期の内容と、第4学年1学期の内容が同じ。
- ・現行の第3学年の3学期に扱っていた内容は扱わないように修正する。
などを配慮した基礎・テストづくりを行った。
- ・32年度実施に向けた準備・情報収集を行った。
- ・新学習指導要領対応の教科書は、平成31年4月に公開される。

各都市総括



本年度総括 さ・東社研

研究主題

「思考力の育成を目指した学習プランの開発」
～子どもが問いをつくり・深め・広げる授業の在り方～

1 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

本部会は、これまで、地域素材を発掘し典型材と比較・分析をしながら子どもの興味、関心を喚起する地域教材開発を行ってきた。そして、サブテーマに「子どもが問いをつくり・深め・広げる授業の在り方」を設定し、調べ活動中、子どもの探求の意識が途切れず連続するよう思考力の育成を図る学習プランの開発を目指してきた。

本部会の研究主題は「問い」をキーワードにした単元全体の構築を考えている。問いで始まり問いで終わる授業の構築である。問いを「つくり」「深め」「広げる」については、以下のように考えている。

- ① 問いを「つくり」・・・追求への意欲を持続するために、問いを児童自らが生み出すよう設定する。
- ② 問いを「深め」・・・問いを解決し、再構築することで深まった課題意識につなげる。
- ③ 問いを「広げる」・・・深まった課題の解決を通して「社会に見られる現代的課題」を見出す。そして、課題に対する関わり方を選択・判断する学習課題の工夫を行う。

(2) 研究活動

日時	会場	研修内容
6月1日	さぬき市立志度小学校	○第1回さ・東小研事前研修会
6月12日		○研究授業および研究討議 第4学年「水はどこから」 授業者 さぬき市立志度小学校 山下 雄基 教諭 講 話 東部教育事務所 岡田 陽一 主任指導主事
7月4日	さぬき市立さぬき北小学校	○香小研夏季研修会事前研修会
7月27日	ハイスタッフホール	○香小研夏季研修会 第3学年「市の様子」 提案者 さぬき市立さぬき北小学校 梅本 明宏 教諭
10月5日	さぬき市立神前小学校	○第2回さ・東小研事前研修会 ○全国小学校社会科研究協議会研究大会事前研修会
10月25日 10月26日	川口総合文化センター 川口市立鳩ヶ谷小学校	○全国小学校社会科研究協議会研究大会 第4学年「水はどこから」 提案者 さぬき市立石田小学校 山崎 悠 教諭 さぬき市立志度小学校 山下 雄基 教諭
11月6日	東かがわ市立三本松小学校	○研究授業および研究討議 第6学年「世界に歩み出した日本」 授業者 東かがわ市立三本松小学校 白澤 一修 教諭 講 話 東部教育事務所 岡田 陽一 主任指導主事

2 研究実践について

(1) 第1回研究会 6月12日 会場 さぬき市立志度小学校

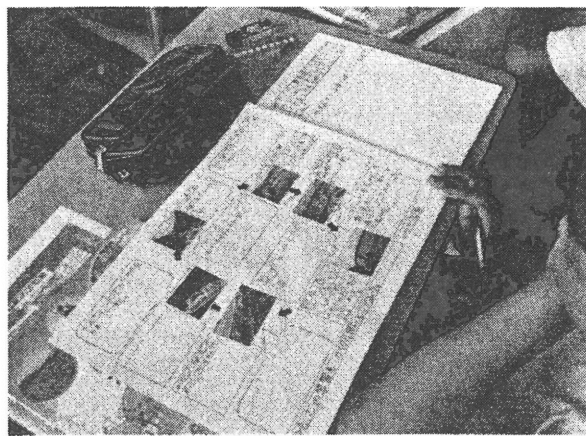
- ① 研究授業 4年 単元名「水はどこから」
- ② 授業者 さぬき市立志度小学校 教諭 山下 雄基
- ③ 授業概要

本実践では、典型材として、教科書で学習を進めたあと、学校の位置する志度地区には、身近な水源がないことに気付かせることで、「志度地区への水はどこからきているのだろう。」という疑問を持たせ、児童の住む地域の実態に即した学習になるようにした。授業は単元終末の学習活動であり、児童がこれまでに獲得した具体的な知識から、「これから自分たちは水とどのように関わっていくとよいか。」をそれぞれにまとめていくところが見どころ。

④ 研究討議のまとめ

ア 「現代的課題」に対する関わり方を選択・判断する活動において、同じ「節水する」という意見でも、教師が理由を問い返すことで、子どもたちが社会的な見方・考え方を働かせ、一人一人多様な背景について語ることができた。

イ 学習問題を設定したり、学習計画を立てたりする際、子どもにとっての学ぶ「必然性」と単元の目標達成に向けて教師がもっている「意図」とをバランスよく組み合わせる方法についてさらに研究を進めていきたい。



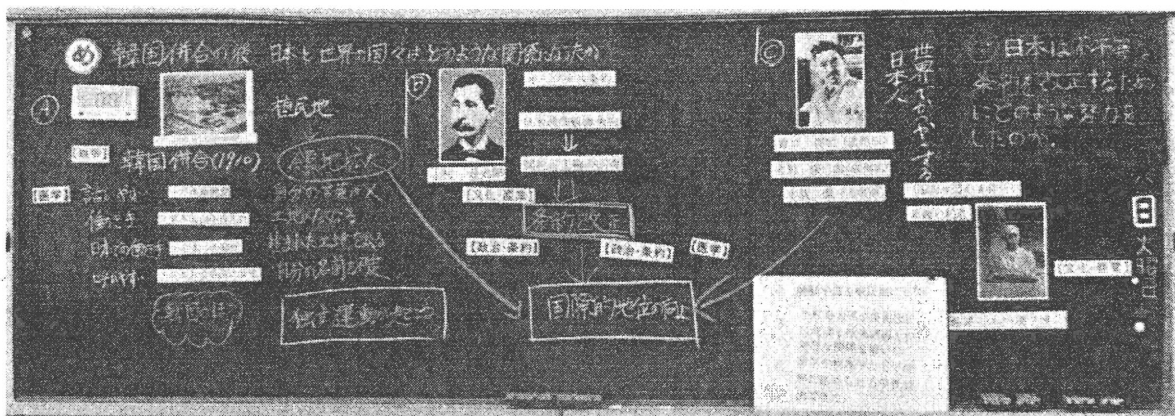
(2) 第2回研究会 11月6日 会場 東かがわ市立三本松小学校

① 研究授業 6年 単元名「世界に歩み出した日本」

② 授業者 東かがわ市立三本松小学校 教諭 白澤 一修

③ 授業概要

本単元は、資料を比較したり対比したりすることに加え、資料から想像して自分なりに歴史的事実を解釈させた。また、資料を根拠に自分の考えをもち、それを伝え合う活動を設定することで、歴史が現代の自分たちの生活にどのようなかかわっているのかを考えさせるところが見どころ。また、中学進学を見据えて資料を精選し、資料の読み取り方も学習している。



④ 研究討議のまとめ

ア 「問いをつくる」から「問いを深める」までの児童の思考の変容を見取ることで、本時の「問い」と「つけたい力」が明確な授業になった。

イ 児童の話し合いや討論の場面は今後も重要。予想やまとめ、振り返りの場を通して、問いを深める工夫を今後も研究する。

3 本年度の成果

- 小中の系統性を意識した授業づくりの視点ができたこと。
- ベテラン教員の様々な経験や知見を継承していく研究の仕組みができたこと
- 若手の研究実践を深めることができたこと。
- 地域の実態に合わせた教材研究の必要性について共通認識が図れたこと。

4 本年度の課題（来年度の方角性）

- R：本部会の社会科教育の成果と課題に関する各種データを分析し、実態をリサーチすること。
- P：これから子どもにとって必要な資質・能力を共通理解し、研究主題や仮説を立てること。
- D：ベテラン教員と若年教員の効果的な研究交流を図り、社会科の授業の見方を学ぶこと。
- C：事後研で、単元構成から見直し、各々の教材研究に生かすこと。
- A：研究方向を改善するとともに、さらに研究実践を積み上げること。

本年度総括 小豆社研

報告者 土庄町立土庄小学校 平林泰徳

1 研究主題

社会認識を深め、社会につながる資質・能力を育てる学習

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

社会認識を深め、社会につながる資質・能力を育てるためには、社会に対するものの見方、考え方を身に付けることが不可欠である。そのために学習過程において、問題解決的な学習を設定しなければならない。その展開の筋道として考えられるのは、

- ① 社会事象に関して事実認識を明確にすること
- ② 事実と事実を関連付けて理解させること
- ③ 社会事象の意味や働きを考えさせること
- ④ 学んだ意識をもとに自分の意思や価値判断を明らかにすること である。

このように、段階を踏むことによって、子どもの意識と思考の流れに沿った学習展開が可能になり、社会認識を育てていく素地が培われていくと考える。さらに、子どもの内面に現れた驚きや戸惑い、葛藤から発生した問題意識をもとに、効果的な資料の提示や調査、インタビューなどの体験的活動、自分で調べたことや考えたことを話し合い、発表する場を設定することによって、追究意識が継続され、社会認識が育ち、社会とつながる資質・能力が育っていくと考えられる。

社会認識を深めることについては、地域社会や我が国の社会生活、社会変化とその対応、我が国の歴史や伝統・文化、社会の一員としての参画といった各単元の社会事象について、観点に沿った情報収集や思考操作による整理などが行え、自分なりの言葉で正しく解釈できる力を伸ばしたい。そのために、どのような手だてが有効か探りたい。そして、社会につながる資質・能力としての、地域や我が国に対する誇りや愛情、よりよい社会を持続するために自ら取り組もうとする態度や能力を、どのように育てればよいかを探るようにしたい。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
平成30年 4月26日(木)	事業計画	組織づくり・研究テーマ・年間計画立案
6月21日(木)	第1回授業研究	第4学年「水はどこから」 授業者 小豆島町立池田小学校 佐藤 忠相
7月27日(金)	香小研夏季研修会	第4学年「水はどこから」 提案者 小豆島町立池田小学校 佐藤 忠相
11月10日(土)	香社研定例会	第6学年「3人の武将」と「日本の近代化への歩み」～討論型学習の推進～ 提案者 土庄町立土庄小学校 上嶋 光晴
11月15日(木)	第2回授業研究	第6学年「日本の近代化への歩み」 提案者 土庄町立土庄小学校 上嶋 光晴

3 研究実践について

(1) 本年度実践授業の単元構成

① 「水はどこから」

次	学習課題	主な学習活動
1	小豆島の地図から水の循環を調べる活動を通して、学習問題をつくり、学習の計画を立てよう。(2時間)	資源としての水と自分たちの生活とのかかわり方を考える。また、小豆島町の地図を調べ、水の循環について疑問をもち、その疑問をもとに学習問題をつくる。
2	川の上流とダムのおきについて調べよう。(2時間)	水源の森が水を蓄えていることと、ダムのおきを関係づけてまとめる。
3	小豆島の水道の広まり方について調べよう。(2時間)	副読本「わたしたちの小豆島」を使って、小豆島が水不足に陥って困っていた歴史を理解し、その解決策として行った水道事業の広がり方をノートにまとめ、小豆島が豊かに水を使える土地になった経緯を調べる。
4	浄水場の工夫や努力、働いている人々の思いや願いについて調べよう。(5時間)	浄水場を見学して、見たことや聞いたことを3観点に分類する。思考ツールを用いて、分類したものをグループごとに説明をしながら再構成する。

5	学習したことをもとに、小豆島の水道の過去、現在、未来についてまとめよう。(2時間)	小豆島の水道の広がり方、浄水場の工夫や努力、人々の思いや願いをカード操作から相関図にまとめて、今から自分たちにできることを交えて、新聞の記事を書く。
---	---	--

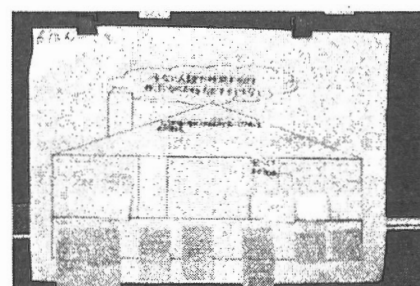
②「日本の近代化への歩み」

次	学習課題	主な学習活動
1	明治～大正時代の出来事から学習問題をつくり、学習計画を立てよう。(2時間)	明治～大正時代の主な出来事から日本の急速な変化をとらえ、単元の学習計画を立てる。明治政府成立の中心人物について業績をまとめる。
2	自由民権運動の展開と民主化への歩みをとらえよう。(3時間)	国会開設・政党の旗揚げ等における板垣退助や大隈重信の業績、大日本帝国憲法制定に見られる伊藤博文の思いや考えについてまとめる。また、大日本帝国憲法の特徴と自由民権派がつくった「五日市憲法」対比する。
3	日本が世界に向け歩み始めた様子をまとめよう。(1時間)	日清戦争・日露戦争・韓国併合・条約改正等、時代の流れに沿ってまとめ、その歴史的意義をとらえる
4	近代化を進めた6人の人物についてまとめ、学習内容をもとに「ミニ論文」を書こう。(4時間)	個人で「業績・思いや考え・社会への影響」の視点ごとに記したカードを、グループで操作して人物事典風に仕上げる。自分に投影することがらを含めて、小論文形式に学習内容をまとめる。

(2) 社会認識を深め、社会に関わる力を育てる方策

①「水はどこから」

浄水場見学を行った後に、単元の学習を通して分かったことを、過去・現在・未来の3観点に分類し、色分けされたカードに記入する。グループ交流にてカードを持ち寄って説明をすることにより、グループ内で再分類しまとめる活動を行う。カードは、「ハウスマップ」を用いて分類・整理する。「過去」の視点である「小豆島の水道の歴史と広がり方」という土台の上に、「現在」の視点である「浄水場の仕事について」「働く人の思いや願い」「働く人の努力や工夫」を柱として、それぞれの柱につながるキーワードを考える形をとる。屋根の部分には、3つの柱の部分で考えたキーワードをもとに、単元のまとめとなる言葉を考える。また、屋根から広がっていく煙の部分には、これから自分たちが取り組めること、地域社会に広めていけることを書き込む。



【ハウスマップによる思考の再構築】

また、屋根から広がっていく煙の部分には、これから自分たちが取り組めること、地域社会に広めていけることを書き込む。

②「日本の近代化への歩み」

明治～大正時代の年表を手がかりに、日本社会の近代化と民主化が急速に進んだことをとらえる。その際に、近代化施策や民主化を中心となって推進した人物の業績に焦点を当てることにより、意欲の継続化を図る。単元の終わりの段階では、近代化・民主化の中心となった人物についてまとめる。まず、業績に加えて当人の思いや考え、国民や社会に与えた影響の3つの視点から個人でカードに書き出す。次に、グループ単位で1人に絞って3つの視点ごとにカード操作を行いながら文章化することで、人物像を練り上げる。この過程で、表現しながら知識と思考を再構成することになる。各グループが学級全体の前で発表を行うことで、全人物の人間像について共有化を図るようにする。最後に一人一人がミニ論文を書く。これまでの学習内容をもとに、これからの生活にどのように生かしていくかという視点を入れるようにする。

4 本年度の成果

カード操作やグループ活動で思考を再構築し発表する活動により、比較や類別といった社会事象の認識を深めるための力を育てることができた。また、主体的・対話的で深い学びにつながる学習展開に迫ることができた。ミニ論文やマップに自分ができるとことや生かしたいことを書くことで、これから自ら生活する社会により主体的に関わろうとする意識を培うことができた。

5 本年度の課題(来年度の方向性)

新学習指導要領における改訂内容を踏まえ、現代的な課題に対応できる資質や能力を育てるため、他教科・他領域との関連も視野に入れた取組をどのように展開するか。

本年度総括 高松社研

報告者 高松市立十河小学校 鶴羽 美緒

1 研究主題

問題解決的実践学習による深い学びの研究 ～学びの3層過程の実践強化による資質・能力の育成～

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

高松社研では、これまで社会科の本質として学ばなければならない基礎的・基本的内容は何なのかを問い続け、教材研究と教材開発を進めてきた。また、従来の教師主導の学習から、子どもの主体性を大切に学習に転換するために、子どもの既存の知識や経験とつないで学習問題をともに設定すること、深い問題解決につながる思考操作の場を設定すること、学んだことを社会に発信することで社会に参画する資質や能力の基礎を養うことなどについて、子どもや地域の実態に応じた研究を進めてきた。本年度は、問題解決的実践学習の深化を通して、資質・能力を育成するために社会的な見方・考え方を働かせる場面を設けた学習を展開し、昨年度までの研究を継承しつつ、学習指導要領の改訂をふまえて研究を進めてきた。主な研究内容は以下のとおりである。

【主な研究内容】

- 1 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す「問題解決的実践学習」についての研究
 - (1) 学びの3層過程の実践強化
 - ①「問題をもち見通しをもつ」段階
 - ②「調べ、考え、表現し、まとめる」段階
 - ③「つなぐ」段階
 - (2) 学びの3層過程における本年度の重点
 - ①「問題をもち 見通しをもつ」段階を充実し、深まった課題にどのようにつながるか
 - ②習得の学び（学力の充実）を深まった課題にどのようにつながるか
 - ③深まった課題を社会参画にどのようにつながるか
- 2 資質・能力の育成を目指した指導計画の充実
 - (1) 単元観 (2) 資質・能力、内容・教材の構造（学習指導要領改訂を見据えた内容研究）
 - (3) 目標と評価規準 (4) 単元構成 (5) 学習の構造 (6) 本時の学習指導 (7) 板書計画
- 3 カリキュラム・マネジメントとしての「学習評価」「授業評価演習」の充実
 - (1) 板書 (2) 自己評価（ノート） (3) 学習評価 (4) 授業評価演習

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4月19日（木）	教科主任研修会	本年度の運営、研究、各種事業の計画等 各ブロックで授業研究、研究討議 南ブロック（十河小・林小）
6月7日（木）	市定例研修会①（教科研）	
7月7日（土）	香社研定例研修会	実践提案（十河小）（警報発令のため9／1に延期）
7月25日（水）	夏季研修会（市）	夏季研修会に向けて分科会発表内容検討
7月27日（金）	夏季研修会（県）	分科会Ⅱ提案（十河小・林小提案）
9月27日（木）	市定例研修会②（教科研）	各ブロックで授業研究、研究討議 北ブロック（高松第一小・太田小・花園小） 南ブロック（川添小）

10月6日(土)	香社研定例研修会	実践提案(高松第一小)
2月9日(土)	高松市社研 研究委員会	本年度の総括・フォーラム発表内容検討等
2月23日(土)	香社研フォーラム	提案発表(川添小・太田小・花園小)

3 研究実践について

		授業者	単元名	実践の概要
第一回 教科研	南ブロック	高松市立 十河小学校 山下 悠	6年 わたしたちの生活と 政治	地方公共団体の政治によって実現した電子黒板の導入の過程を調べたり、日本国憲法とのつながりについて考えたりする中で、日本の民主政治は、日本国憲法の国民主権と深く関わっていることを理解していった。
		高松市立 林小学校 木戸 隆也	4年 ごみのしよりと利用	産業廃棄物を取り上げ、処理にかかわる対策や事業について調べ、ごみの減量や資源の再利用などについての必要なきまりを考えることを通して、自分たちの関わり方を考えていった。
第二回 教科研	北ブロック	高松市立 高松第一小学校 中西 清美	4年 自然災害から くらしを守る	平成16年の台風災害を取り上げ、過去から現在までの防災対策を学ぶとともに、他地域の風水害による甚大な被害が出てしまった地域と犠牲者を出さなかった地区を比較し、被害を減らすために必要なことを考えた。
		高松市立 花園小学校 西 奏子	3年 店ではたらく人	校区にある2つのスーパーマーケットを比較し、工夫を比較することで、働く人が地域の人の多様な願いを踏まえて工夫して仕事をしていることを理解していった。
		高松市立 太田小学校 古田 将大	4年 きょう土をひらく	西嶋八兵衛を中心に調べを行い、3つの視点(技術・道具、人物像、人とのつながり)をもとに知識を習得し、当時の社会背景や人々の願い、地域の発展とつないで考えていった。
	南ブロック	高松市立 川添小学校 香川 昌輝	3年 市の様子の変り変わり	高松市の中央部の移り変わりを「交通や公共施設の整備」、「土地利用の様子の変化」、「人口の変化」の3つの視点で分析し、高松市の中央部の移り変わりを理解し、これからの自分たちのまちについて構想していった。

4 本年度の成果

各研修会に向けて、高松社研の部員が一丸となり、研究・運営に携わった。定例研では、高松社研独自の「授業評価演習」を討議に取り入れることで、研究の内容だけでなく、討議の方法についても発信することができた。

5 本年度の課題と来年度の方向性

これまでの研究成果や全国大会の成果を来年度にも生かしつつ、高松社研の部員が力を合わせて、新学習指導要領の内容を見据えた内容研究と授業づくりを行っていきたい。

1 研究主題

主体的にかかわりながら追究する社会科学習の創造

— 対話の活性化を図る単元構想の工夫 —

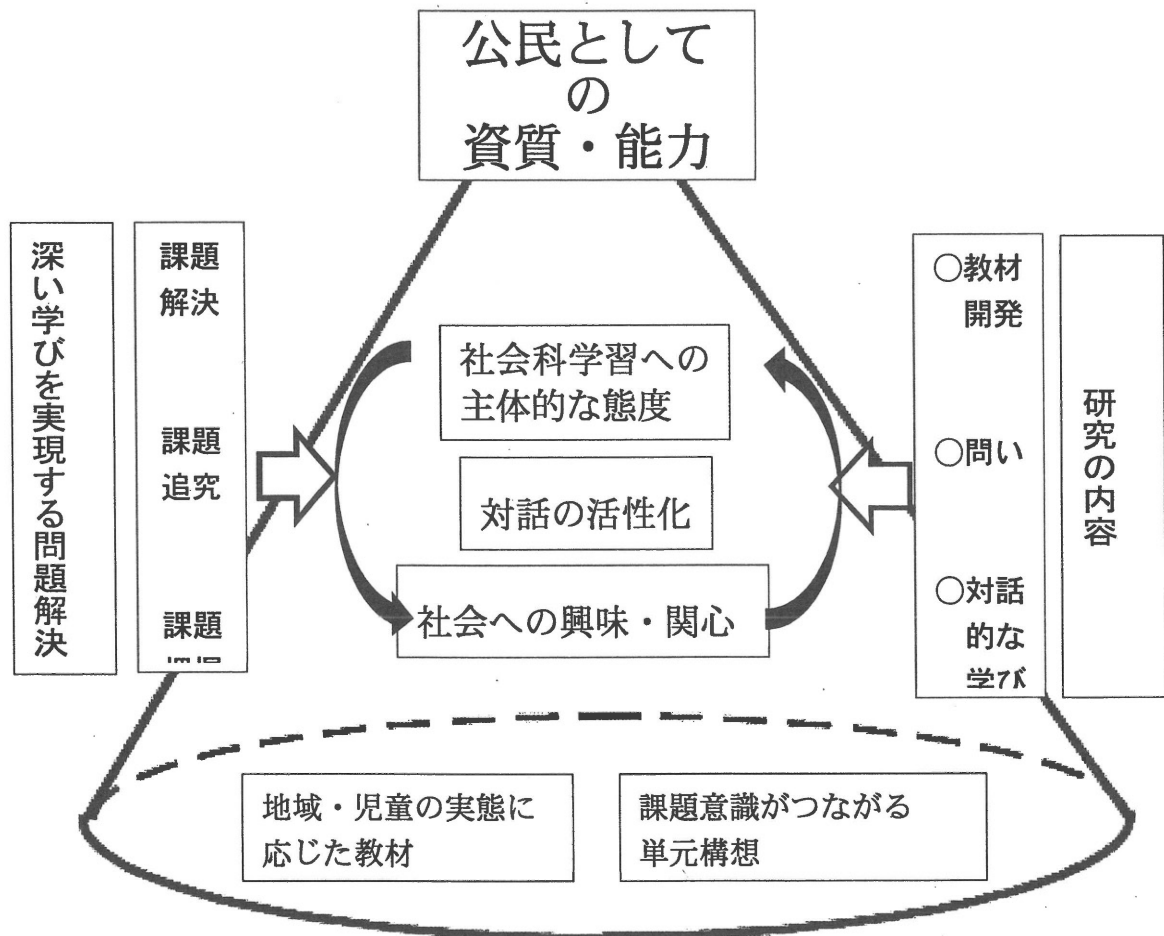
2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について

子どもを取り巻く社会は、情報化やグローバル化などが人間の予測を超えて加速度的に進展しており、急激な変化が続けている。そうした変化は複雑で予測困難となっており、すべての子どもたちの生き方に大きく影響するといえる。このような時代だからこそ、子どもたち一人一人が変化に受け身的になるのではなく、主体的に向き合い、他者とも協働して社会や人生をより豊かなものにしていくことのできる資質・能力を育むことが必要とされている。

小学校社会科の目標は、「公民としての資質・能力の基礎を育成すること」である。公民としての資質・能力とは、個人として社会に適応し、自分とのかかわりで問題を発見したり、解決したりすることのできる力である。さらに、社会の人々とも力を合わせ、様々な問題を解決し、よりよい未来を考えたり、創っていかうとしたりすることのできる力を育てていく必要がある。

以上のことから、社会的事象に主体的に向き合い、子ども同士で、また、実社会の人々ともかかわり合いながら協働的に追究していく子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

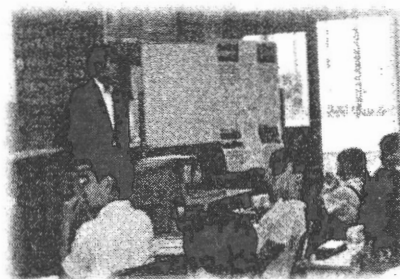


(2) 研究活動

日時	活動	内容
3月 下旬	事前勉強会	来年度の研究について
4月18日	坂綾小研総会	組織編成について
5月18日	坂綾小研事前検討会	第3学年「わたしのまち みんなのまち～坂出市の様子～」指導案検討
6月 6日	坂綾小研研究授業①	第3学年「わたしのまち みんなのまち～坂出市の様子～」授業実践
6月15日	定例研修会事前勉強会	第3学年「わたしのまち みんなのまち～坂出市の様子～」提案資料検討
6月23日	定例研修会	第3学年「わたしのまち みんなのまち～坂出市の様子～」実践提案
7月24日	夏季研修会事前勉強会	夏季研修会役割分担について
7月27日	夏季研修会実践発表	第3学年「わたしのまち みんなのまち 坂出市の様子」実践提案
10月 5日	坂綾小研事前検討会	第5学年「作り出せ！新しい価値 研究開発で新製品誕生～私たちの生活と工業生産～」指導案検討
10月17日	坂綾小研研究授業②	第5学年「作り出せ！新しい価値 研究開発で新製品誕生～私たちの生活と工業生産～」授業実践

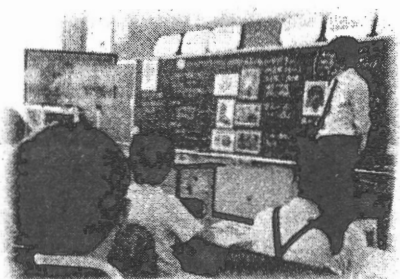
3 研究実践について

研究授業Ⅰでは、現在、校区にある坂出北インターチェンジのフルインター化計画が進んでいることを取り上げた。そこで、なぜフルインター化が必要なのかという疑問を、地図や読み物資料、市長のビデオレター等の資料をもとに解決していく中で、子どもたちは、坂出市が香川県の交通の要衝であることに気付き、自分たちの住む坂出市に対する愛情や誇りをもつことができた。また、教材開発では、市の様子を鳥瞰的に捉えられるドローンの空撮映像や、気になる場所を即座に調べられるグーグルアースのストリートビューを取り扱うなど、学習意欲を高めたり主体的に学べたりする工夫があった。



〈研究授業Ⅰ 授業風景〉

研究授業Ⅱでは、研究開発に力を入れている県内企業・株式会社レクザムを教材化しての実践を行った。レクザムでは、自動車部品や家電製品、スキーブーツ、地ビールなど多様な製品が製造されていることを紹介することで、学習課題を「なぜレクザムでは、たくさんの種類の製品を作ることができるのだろう。」と設定し、たくさんの自作資料の中から、考えの根拠を探し、自分たちの考えを組み立てていった。児童は開発された商品の一つ一つ調べていくことを通して、客の多様な要望に応えるために多くの研究者が日々努力している姿に気付くことができた。



〈研究授業Ⅱ 授業風景〉

4 本年度の成果

高速道路のフルインター化や研究開発を取り上げるなど、どちらの実践も現代的な課題に焦点を当てたもので、新学習指導要領への移行に向けた実践として価値のある実践であった。また、子どもの疑問を引き出し、「知りたい」「調べたい」という追究意欲を高める単元展開の工夫がなされ、意欲的に学習に取り組み、社会的事象への理解を深めることができた。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

子どもが問いをもつには、教材の質や教材との出会わせ方が大きく影響する。子どもたちが、自分なりの疑問をもち、予想をしたり、調べたり、話し合ったりすることを通して、課題を解決することに楽しさや喜びを感じられる単元を構築していきたい。また、教師や児童が、課題の追究の中で学びの振り返りを大切にすることで、社会科の深い学びを実現できるように研究を重ねたい。今後も、必然性の高い問いを作り、話し合い活動を通して問題解決に向かう単元をどう構築していくか、より一層の実践研究を進めていきたい。

本年度総括 丸亀社研

報告者 丸亀市立飯山北小学校 小山 沙織

1 研究主題

自立と共生を育む社会科学習

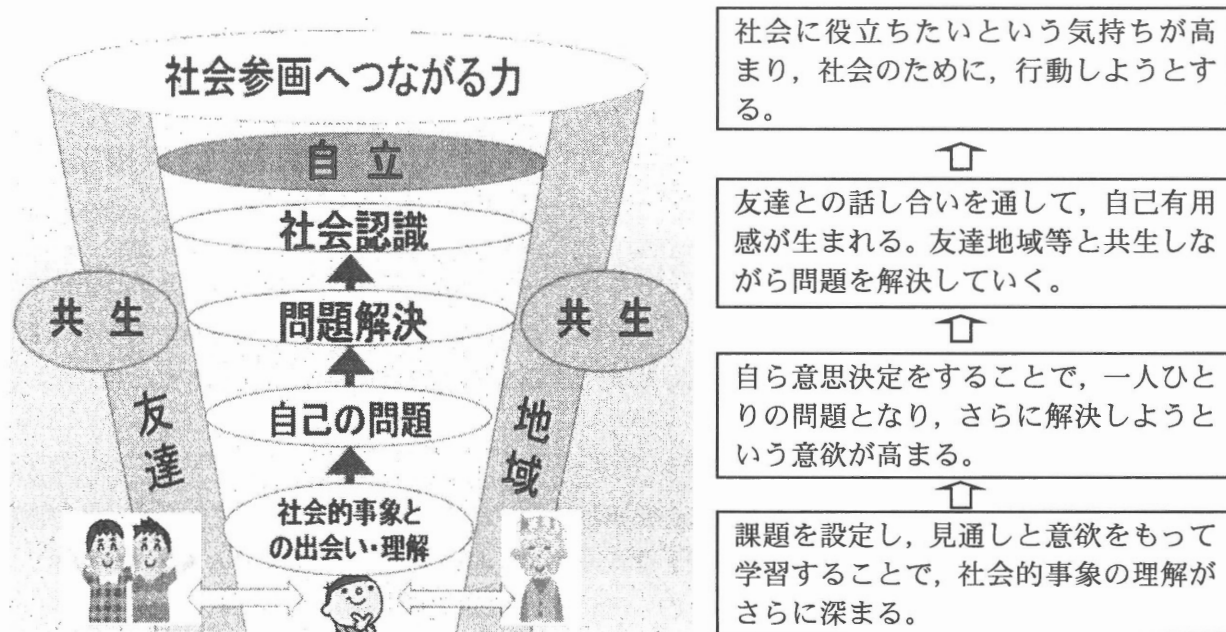
2 本年度の研究の概要

(1) 研究主題について

丸亀市小学校教育研究会社会科部会では、生涯を通じて学び続ける力、自分の頭で考える力及び他者との協働の中から新しい価値を見出していく力を付けていくことが小学校段階で望まれると考えた。とりわけ社会科教育においても、社会的事象に関する基礎的な知識や概念、技能を身に付け、自分の考えをもち（自立）、他者との協働を通じてよりよい社会を形成しようとする態度（共生）を身に付けることが大切であると考えた。

「自立」とは、自己形成すなわち自分づくりであり、自分の目標を明確にもち、それに向かって自ら意思決定しながら学習を進めることである。「学習」を個と集団の学び合いとするなら、まず個が課題を追究し、更に協働し、共感的に問題解決をしていくことが重要である。学習活動を通じて自立する力を育むためには、意思決定の場を効果的に取り入れることにより、自分のこととして課題をもつことができる。また、十分に社会的事象に対する理解を深め、自ら意思決定をすることで、自己の問題を再構成する状況が生まれる。さらに意思決定することにより、自分で決定した満足感、新しい知識による再認識に対する充足感を子どもたちは感じることができると考えている。これからの学習指導では、こうした学習経験を重ねることで、子どもたちに自己有用感を育てていくことが必要であると考えた。「共生」とは、個と集団の学び合いの中で新しい価値を見付け、社会参画への意欲をもったり、みんなと協力して行動したりすることである。言い換えると、社会や他の人から必要とされていることを感じながら、力を合わせて共に生きていこうとする意思や態度を培うことをめざしていきたいと考えている。

「自立」の過程において、社会認識・知識・概念等、基礎的基本的な事項及び内容を踏まえ、意思決定を行い、さらに、社会の一員としての自覚をもって参画していこうとする「共生」の意識を育てていきたいと考え、研究主題を「自立と共生を育む社会科学習」とした。



【研究構想図】

(2) 研究活動

日 時	会 場	研 究 内 容
4月13日	城東小	研究組織づくり, 研究主題決定, 年間計画作成, 夏季研勉強会
5月30日	城乾小	丸小研研究授業 4年「住みよいくらしをつくる」 授業者 丸亀市立城乾小学校 小西 崇夫 教諭 指導者 香川大学教育学部附属高松小学校 黒田 拓志 教諭
7月27日		夏期研修会 4年「ごみの処理と利用」 提案者 丸亀市立郡家小学校 櫻井 道芳 教諭
9月29日	城東小	定例研修会 4年「きょう土の はってんに つくす」 提案者 丸亀市立城乾小学校 小西 崇夫 教諭 指導者 高松市総合教育センター 河田 祥司 指導主事
11月28日	垂水小	丸小研研究授業 4年「きょう土の はってんに つくす」 授業者 丸亀市立垂水小学校 吉岡 秀記 教諭 指導者 丸亀市立城東小学校 合田 吉宏 教頭先生

3 研究実践について

研究授業 <第4学年「住みよいくらしをつくる」>

－主体的に学習課題をつくり出すための単元導入の工夫－

問題を身近なものとしてとらえ, 「丸亀市」「家のまわり」など, 地域の写真と一般的な教科書の資料を行き来しながら考えさせた。教科書のイラストは, 本時の終末には自分たちの住む城乾小学校区の航空写真に置き換え, 単元の終わりまで掲示し続けた。

単元の導入時に私たちの「健康で住みよい暮らし」を支えるものは何か, 資料を読み取る時間を十分に確保した。グループでイラストの中から見つける活動中, 本単元の学習に関連するキーワードが出てきた。

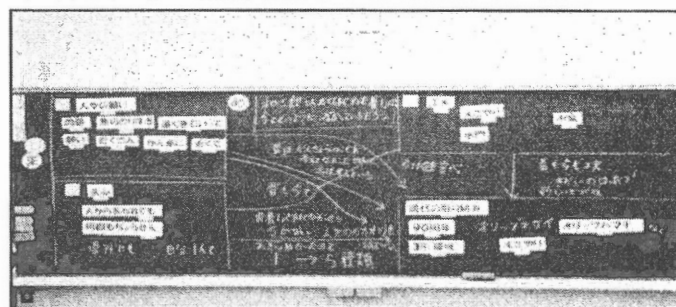


【グループ交流の様子】

研究授業 <第4学年「きょうどの はってんに つくす」>

－地域の発展に尽くした先人たちの働きと, 自分たちの生活を結びつけるための工夫－

ハマチの養殖や, 野網和三郎の働きについて調べたことをポスターにまとめ, 地元のスーパーマーケットに掲示してもらうという単元の目標を設定することで, 児童の学習意欲の向上を図った。資料から読み取ったことを「村の人の願い, 養殖が成功した後のこと」「和三郎さんの苦心」「和三郎さんの工夫」「現代の養殖の取り組み」の4つの内容に分類した。さらに, 資料から読み取ったことを「時間」・「人・物」・「場所



【グループ交流の様子】

(空間)」の3つの視点をもとに線で結ぶ活動を通し, 昔と現代がつながっていることに気付かせた。

4 本年度の成果

- 研究授業や夏季研修会, 社会科授業をするための勉強会をもつことで, 部員各々が研究主題について分析し, 研究主題を念頭に, 授業や提案発表を作っていくことができた。そうすることで, 研究の方向や新たな課題が一層はっきりしてきた。
- グループ交流での資料の読み取ら方や, グループ交流での学びを土台にした, 全体交流での学びの深化など, 資料を活用して児童の学びを深める授業過程について研究ができた。

5 本年度の課題

自立の部分「判断・意思決定の場」の意味や目的などをさらに明確にし, 共生の部分「話し合い」「社会参画」に視点を置いた研究を進めていきたい。

本年度総括 仲善社研

報告者 善通寺市立西部小学校 大木 陽平

1 研究主題

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学習の展開

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

急速に変化していく社会の中で変わらないことは、そこに人が存在し、人が関わって社会が変化していくということである。これまでの社会を維持・発展させてきた人の工夫や努力、思いや願いを子どもが学ぶことで、社会を構成する人（自分）と人とのつながりを見出していく。そうすることで、社会に対する理解と愛情を高め、よりより社会にするために何が必要か考えて行動できる子どもを育てたい。

社会を構成する人々の行為の意味を「便利さ」や「損得」など、子どもが経験上持っている視点からだけで考えてしまっては偏った見方になってしまう。子どもが時間・空間・立場などの新たな視点から社会的事象を見つめることで、人々の行為の意味がより見えてくる。このように多様な視点から考える子どもを育てたい。

そこで、人の行為を時間・空間・立場などの視点から追及し、習得した知識を再構成したり、選択・判断したりすることで、広い視野をもって現実を前向きに切り拓き、社会と関わり、自らよりより社会を創り上げていけるような態度を養うことができるのではないかと考え、本年度の研究内容を設定した。

(2) 研究活動

日 時	活 動	内 容
4月18日	香小研仲善支部 総会	組織・運営について
6月9日	香社研定例会	授業研究 6年「時代の転換点に建つ金閣と銀閣」 授業者 善通寺市立筆岡小学校 教諭 尾崎 純一
6月12日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	授業研究 5年「米づくりのさかんな地域」 授業者 善通寺市立東部小学校 教諭 小野 祐太
7月25日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	香小研社会科部会研究発表会満濃南大会 指導案検討
7月27日	香小研社会科部会 夏季研修会	提案発表 5年「米づくりのさかんな地域」 提案者 善通寺市立東部小学校 教諭 小野 祐太
11月14日	香小研仲善支部 社会科部会研修会	授業研究 4年「瀬戸内海に夢の橋を架ける」 発表者 善通寺市立筆岡小学校 教諭 吉原 彬宏

3 研究実践について

小野実践では、授業者が実際に現地を訪れ、庄内平野の米づくり農家の工夫や努力に直接触れることで、香川県にはない工夫を見つけることができた。また、庄内平野の米づくり農家は自然条件を生かして大型の機会を使い、大規模で効率的な稲作をしているため、課題が見えにくいということにも気付くことができた。米歴史年表や米伝来地図を用いることで、時間的な視点や空間的な視点で米づくりが先人の工夫や努力によって営まれてきたことを捉えさせることができた。そして、香川県の耕作放棄地に目を向けることで、作付面積の減少、高齢化や後継者不足などの米づくりの課題を、香川県の米農家が共同作業や法人化によって克服していこうとしていることを捉えることができた。

吉原実践では、子どもの聞き取り調査をもとに、瀬戸大橋建設当時の人々の思いについて、子どもたちが整理した「いつでも行きたい」「早く行きたい」の「願い」が叶ったことをもとに、「学生」「農家」「うどん屋」の3つの立場を提示して、生活の変化について意欲的に考えられた。また、瀬戸大橋開通で、生活が変わった人たちについて考え、資料から検証したことを再構築し、瀬戸大橋による生活の変化を自分たちの立場に置き換えて考えられていた。

尾崎実践では、足利義満が貿易を始めるまでに30年かかった事実を提示することで、「なぜ義満が貿易にこだわったのか。」という問いを児童に持たせていた。児童は、当時の室町幕府がおかれた状況にその理由があると予想し、既習事項の遣唐使や平清盛が行った日宋貿易とつないで考えていた。また、義満が貿易をしたかった理由を考えた後、「貿易を独り占めして得をしたのは義満だけだったのか。」とゆさぶり、経済的な視点を加味することで、守護大名・明・商人など様々な立場から日明貿易について考えさせることができていた。

4 本年度の成果

どの実践も、授業や単元の中で取り扱う事象を「人間の行為」としてとらえ、考えていくことで、児童の社会的事象に対する内容理解を深めることができた。また、児童の見方や考え方の「時間、空間、立場」を広げるような手立てを意識して行うようになってきた。授業や単元の流れの中で時間を広げて考えたり、空間を広げて考えたりする場面を設定する実践を継続して取り組んできた成果である。

5 本年度の課題（来年度の方向性）

「時間、空間、立場」を広げるような手立てを行うようになってきた。しかし、習得した知識を再構成したり、選択・判断したりし、広い視野をもって現実を前向きに切り拓き、社会と関わり、自らより社会を創り上げていけるような態度を養うことができているかと問われれば、まだまだ十分であるとは言い難い。今後も、授業実践を通して、単元を通して補助黒板を活用し、既習の資料とつないで考えることを習慣づけたり、学習内容を仕組み図や関係図にまとめ、それを基に社会的事象の意味や価値について考える場を設けたりするなど、資料と繰り返し向き合う機会を設定し、子どもが根拠に基づいて広い視野から考えられるようにしていく必要がある。

1 研究主題

『今』を見つめ、『未来』を拓く社会科学習の創造

－ 基礎的・基本的内容を身に付け、自ら問いを追究する社会科学習の展開 －

2 本年度研究の概要

(1) 研究主題について

子どもを取り巻く社会は国際化・情報化が加速的に進行し、それに伴って人々の価値観や生き方が多様化し、急激な変化を続けている。環境問題やエネルギー問題など、個人や1つの国の努力では解決が難しい問題も山積している。そうした先行き不透明な時代において問題を解決しながら持続可能な社会をつくるためには、誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく、一人一人が主体となって問題を引き受けなければならない。そのため、自力あるいは他者と協働して、知識を基盤に新しい答えや価値を生み出すことができる資質・能力が必要とされている。

三観社研では子どもたちに、社会の傍観者ではなく、形成者としての意識を育てながら、『今』ある「社会」を的確に理解し、公正に判断する力を身に付けさせたいと考えた。そして、これからのよりよい「社会」を問い続ける『未来』を拓く子どもを育てたいと考え、本主題を設定した。

① 子どもの追究意欲を高めるための教材の開発

- 学習指導要領、教科書分析、教材研究、児童の実態の分析

② 「切実になる問い」の研究

- 社会的事象に対して矛盾や驚き等を感じ、解決したいと知的好奇心が喚起される問い。
- 問題に対する自分の考えが他者と異なり、どちらが正しいのかを明らかにしたいという問い。

③ 子どもの「社会的な見方・考え方」を成長させるための工夫

- 問題解決的な学習の過程で活用する3つの観点(時間・空間・人間)、視点を広げる教師の出番

(2) 研究活動

4月25日	三観小研社会科部研修会(役員選出・年間計画)
7月25日	三観小研社会科部夏季研修会(香小社研全体会・分科会提案リハーサル)
7月27日	香川県小学校教育研究会 社会科部会夏季研修会
10月17日	三観地区小学校教育社会科学研究発表会(授業研究 4年「きょう土のはってんにつくす」)

※ 三観社研及び社創研での授業研究や検証を定期的に行ってきた。

3 研究実践について

実践事例①・・・第4学年 単元名 「きょう土のはってんにつくす」

＜子どもの追究意欲を高めるための教材の開発＞

本単元では、地域の発展に尽くした人物が活躍した頃の様子やその活躍が必要であった背景に着目して、先人の働きを捉えていく。そのために、教師は以下の2つの視点を持ち、教材の開発を行った。

○ 具体性…川端喜久治氏と「電気導入事業」

伊吹島は、地理的な要因から、水や電気といったライフラインの確保は、島のくらしにとって必要不可欠な課題であった。その課題に尽力したのが、川端喜久治氏である。川端氏を教材として扱うことで、学校近くの銅像や碑から調べ学習をしたり、当時を知る地域の方への聞き取り学習を行ったりするなど、子どもたちが直接経験しながら学びを進めることができると考えた。



【川端喜久治翁像】

○ 矛盾性…電気導入事業の大きな困難

聞き取り調査から、電気の確保は当時の島民にとって切実な願いであったといえる。しかし、島民の中には、多額の負担を強いられるため、導入への反対の声もあがったようである。それでも川端氏は、会を結成し各方面に嘆願したり、島民大会を開いて島民の理解を得たりした。「島民の生活をよりよくしたい」「いりこ産業の開発・発展を図り、経済の悪化にあえぐ島民のくらしを豊かにしたい」という川端氏の苦心を学び取っていくことで、現在、島に住む子どもたちが郷土を愛する思いを育むことができるのではないかと判断した。

実践事例②・・・第5学年 単元名「工業を支える」

＜「切実になる問い」の成立に向けて＞

本単元では、「中小工場のものづくりの様子を調べ、働く人の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現する」ことをねらった。

子どもたちは、本時まで、「みつろうペン」の製作にかかわった人の働きを調べ、開発にかかわる工夫や努力について学んでいた。つまり、「大田区の工場はそれぞれの得意な技術がある」ということを漠

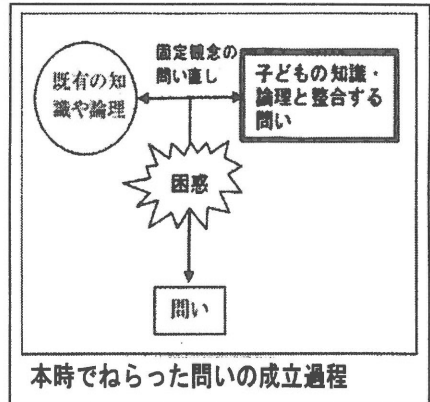
然と理解している状態であった。そこで、本時は、「技術を持ち寄り、互いに協力しながら製品を創り出している大田区の中小工場のものづくりの工夫や努力を捉える」ことをねらった。その際、子どもたちがより強くその事象への理解を獲得できるように、「切実になる問い」を成立させようとした。三観社研では、「切実になる問い」とは、子どもの心情（驚き、困惑、葛藤等）が揺さぶられ、子どもの内面に位置付けられ、学習への主体性の喚起を促すものと定義している。

本実践では、右図のように、子どもの既有的知識や論理に対して、あえて「分かっていること」、つまり、「子どもの知識・論理と整合する問い」を投げかけた。

まず、子どもたちにこれまでの「みつろうペン」の学習を想起させ、8年間もの長い歳月がかかったことや、「みつろうペン」は『下敷き』と『ペン部分』の大きく『2つの部分』に分けられることを押さえた。その上で、教師は「どうして4つの工場にお願いしたのか？」と問いかけた。この問いを子どもたちに投げかけると、

「そんなことはもう知っている。先生はどうしてそんなことを尋ねるのだろう？」

と戸惑うだろうが、既に知っていることだけに、これまで獲得してきた知識やそこから生まれる予想を話し合い吟味していくだろうと考えた。さらに、その活動を通して、「工場にはそれぞれ得意な技術があること」や「工場同士の協力」を強く学びとることができると考え、実践した。



＜「社会的事象の見方・考え方」を生かし、子どもの社会認識を深めるための工夫＞

本時では、児童は学習問題に対して、「人々の工夫」、つまり、各工場の技術という『人間』の働きに着目し、「それぞれの工場の得意なことを生かす」という考えにまとまっていった。

そこで、教師は、大田区の白地図を提示し、4つの工場の位置にシールを貼ることで『空間』を意識させた。

次に、田中さんたちが製作したトロフィーを提示し、その技術の素晴らしさに着目させ、すごいと感じたことを発表させていった。そして、「トロフィーも同じ4つの工場で作ったのか？」を子どもたちに考えさせた。

子どもたちは、「みつろうペン」と全く違う製品であることから、違う工場であることを予想した。その後、教師は、トロフィーを作った工場の場所を地図にシールで表し、線でつないでいった。さらに、みつろうペンを作った4つの工場も線でつないだ。すると、子どもたちは口々につぶやいた。

「一緒に作っている工場が近い！」「どうして大田区には技術が高い工場が集まっているのだろう。」「みつろうペンもトロフィーも協力して作っているのかな。」

そこで、教師が「もし工場が離れていたらどうか？」と尋ねると、以下のような反応を示した。

- ◇「工場同士が遠くにあったら、部品が届きにくく、話し合いをするのも時間がかかる。」
- ◇「運ぶのに不便だし、運ぶ時に傷つくこともある。」
- ◇「離れていたら力を合わせにくい。中小工場は働く人数は少ないけど、高い技術をもつ近くの工場同士が協力するからすごい製品を作ることができる。」

つまり、子どもたちの中に『空間』が意識され、大田区の中でも協力する工場は近くに集まっていることに気付いたのであろう。さらに、みつろうペン以外の製品作りも、「高い技術」「工場同士の協力」が欠かせないことに気付くことができた。このように、教師の出番として、『空間』の視点から考えさせることで、児童は「工場の優れた技術」から「工場同士が協力することでさらによいものづくりができること」へと理解を深めていったのだった。

4 本年度の成果

- 本年度の香小研夏季研での提案発表（全体提案・分科会提案）に向けた活動を核として、ベテランのもつ理論的な内容について、若手教員が理解できる部分が増えてきた。また、各分科会に向けてそれぞれが役割をもって動いたことで、組織としての意識が高まった。

5 本年度の課題（来年度の方性）

- 「切実になる問い」の成立がどの授業研究においても難しかった。子どもの心情が揺さぶられるために、実態や意識の流れをより大切にして、教材の精選や単元構成を組み立てていく必要がある。



香社研だより



香社研だより 仲善

<香社研テーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学学習

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を、教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～

<仲善社研のテーマ>

人間の営みに学び、広い視野を育てる社会科学学習の展開

6月定例会 仲善ブロック集会

日時 平成30年 6月 9日(土) 於：善通寺市立筆岡小学校

実践提案 第6学年 郷土の発展に尽くす

「時代の転換点に建つ金閣と銀閣 ～おじいさんの願いは孫に伝わったのか～」

授業者 善通寺市立筆岡小学校 尾崎 純一

提案者 琴平町立琴平小学校 竹森 仁志

1 提案の主張点

- (1) 貿易を始めるまでに30年かかった事実を提示し、なぜ足利義満が貿易にこだわったのかという問いをもたせる。

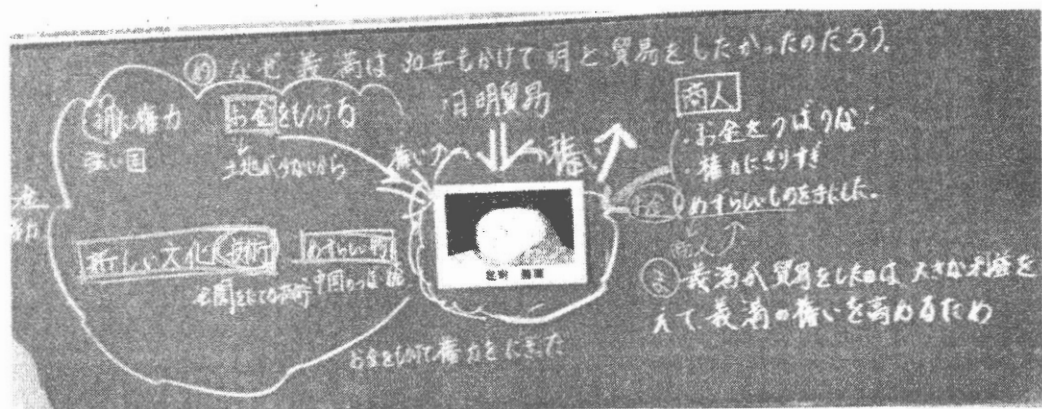
1373年に貿易を希望するが明に断られ、その後も貿易を実現するために、ずっと準備をし続け、1402年に実現した事実を提示することで、子どもは「なぜ30年間もあきらめずに続けたのだろう」、「なぜ義満はここまで貿易にこだわったのか」と疑問をもつだろう。それは、当時の室町幕府が置かれた状況に理由があるはずだと前時の学習とつなぎ、既習事項である遣唐使や平清盛が行った日宋貿易とつないで考えられるようにする。日明貿易を扱うことで、より、義満が金閣にこだわった理由や既習事項が理解できるというよさがある。

- (2) 経済的な視点を加味し、守護大名・明・商人など様々な立場から日明貿易について考えさせる。

本時では、まず、義満がなぜ貿易をしたかったのか義満(幕府)の立場から考える。その後、貿易を独り占めして得したのは義満だけだったのかとゆさぶり、義満に関連する他の立場の人にとってどうだったのかを考えさせる。そうすることで、義満の意図を、よりつかむことができると考える。

明とは互いに貿易をすることで利益を分け合う、Win-Winの関係である。商人がもうけることで、そこから税が義満に入り、さらに儲けることができる。だが、守護大名はこれらの2者とはちがひ、貿易による利益がない。そのため、力をつけることができず、義満と力の差が広がる。さらに、義満が独占していた貿易の勘合を、義政は守護大名に売る。

様々な立場から見ることで、商人や明にとっても貿易が得であることに気付かせることができる。その上で、義満と様々な立場の人の関係図に返すことで、義満の権力が強まることを理解させたい。また、本時で義満は守護大名には貿易をさせなかったことをおさえたうえで義政を学ぶことで、両者の考え方の違いをとらえることにもつながる。



2 討議内容

- これまでの各時代の学習の履歴が掲示されていた。既習事項と比較して考える手がかりになる。
- 貿易をしたことで金閣が建てられたのか。それとも金閣を建てたことで貿易ができるようになったのか。後者だと、貿易によって「技術」が入ってきたというのはおかしいのではないか。当時の日本の技術では金閣は建てられないはずである。
- 本時では、「商人はもうからない」と考える児童が多い中、「商人ももうかった」という流れになった。けれども、それを検証するために使った映像資料は検証にならず、曖昧なままだった。
- 貿易により、日本から明へ貢ぎ物が送られ、民から日本へ絹とお金が入ってきた。子どもたちに、お金が大事であるという認識がなかったように思われる。
- 単元名にある「おじいさんの願い」とは、義満が孫の義政に室町幕府を繁栄させることであろう。しかし、単元構成を見てみると、義満の視点ばかりで幕府という視点がない。本時の後半では、当時の世相を教えたうえで、「なぜ国内に対しても国外に対してもここまで義満はしなければいけなかったのか」を考えていくとよかったのではないかと思います。
- めあてが出た後、根拠が薄い予想で流れてしまっていた。また、後半は色んな立場から自由に話をさせることで思考が深まったかもしれない。
- 100年という長さ、30年という長さをどうとらえるか。また、義満が15歳のときと44歳のときの気もちの違いはどうか。
- 文化はどうつながるかは整理して、単元構成の中で見えるようにしていかなければならない。

3 ご指導

西部教育事務所 主任指導主事 林 聖士先生

① 子どものなぜを大切に授業、単元構成

- ・ 学習問題は子どもたちとつくる。
- ・ 30年という意識は子どもたちに継続していたか。継続していなければ、助言等が必要だった。
- ・ お金や利益といった気づきに焦点化していく作業が必要だった。

② 意見の交流

- ・ 子どもたちが話したい、聞いてみたいとい必要性を高めてから交流するとよい。

③ 検証・振り返り

- ・ 検証の場面で使用した映像資料で、子どもたちはお金に反応していた。「現在のお金にすると…」のように分かりやすくしてやると、より理解が深まったかもしれない。
- ・ 振り返りでは何を振り返らせるとよいのか。

香社研だより 坂出

<香社研テーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学学習

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を、教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～

<坂出・綾歌社研テーマ>

主体的にかかわりながら追究する社会科学学習の創造

－対話の活性化を図る单元構想の工夫－

6月定例会 坂出・綾歌支部

日時 平成30年6月23日(土) 於:坂出市立坂出小学校

実践提案 第3学年 みんなのまち わたしたちのまち ～坂出市の様子～

提案者 坂出市立坂出小学校 教諭 藤島 太一 先生

綾川町立昭和小学校 教諭 網野 未来 先生

1 提案・討議内容

6月には、3年生の授業について、定例会における発表、話し合いが行われた。坂出市の様子について主体的に関わりながら追究する授業で、様々な視点から意見が出され、話し合いが行われた。

单元名 「わたしのまち みんなのまち ～坂出市の様子～」

主体的に関わるとは、社会的事象に主体的に関わる、子どもたちどうしが主体的に関わる、実社会の人々と主体的に関わる等様々な関わりが意識される。单元構想については、以下のような視点が考えられる。

(1) どんな教材か？

「生活に密着しているか？」「楽しさ、意義を実感しているか？」「学ぶ意欲をもっているか？」「自分事としてとらえられているか？」

(2) 問いをもっているか？

「分からないことはなにか意識しているか？」「自分なりの予想、見通しをもっているか？」「学びを振り返り、次の学びにつなげられているか？」

これらを意識し、主体的に関わりながら追究する社会科学学習の想像を行っていく。

授業においては、以下のような点を意識し、取り組みが行われた。

(1) 教科書の学び方を生かした学習展開

(2) ドローンの積極的な活用

(3) 現代的な課題を取り入れた学習内容の工夫

また、授業者の思いとして、次の視点も大切にされた。

- (1) 坂出市には、様々なよさがある。
- (2) 坂出市は、陸路における「四国の玄関」といえる。
- (3) 坂出市には、瀬戸大橋があり、その便利さがある。
- (4) 校区内の坂出北インターチェンジのフルインターチェンジ化が計画されている。

教材開発としては、ドローンの映像の活用で、校区やその周りの様子がたいへんイメージし易く、関心も高まっていた。

学習を行う際、南インターチェンジとの違いを資料で確認していく取り組みの進め方についても話し合いが行われた。

現在は、岡山方面にしか行けない。徳島、愛媛、高知方面にも行けたらいいのに。そのことについて、「〇〇方面」をクローズアップした地図を用いてはどうかという意見も出された。

坂出市長へのインタビューの動画も紹介、確認され、授業での活用の仕方について話し合われた。

- (1) ハーフインターチェンジとフルインターチェンジの違いについて。
- (2) 北インターチェンジをフルインターチェンジ化することの良さについて。

- ① トラックの量が分散し、市内の通行が現在よりも安全になるのではないか。
- ② 四国方面にも行けるようになるので、さぬき浜街道の活性化が図られるのではないか。(うどんやその材料の約9割が坂出市に集荷されている。)
- ③ 防災拠点にもなる。

対話を大切にする思いから、単元構成ではなく、単元構想とした。南インターチェンジの周りについては、あとから学習するやり方も考えられるが、「わたしたちの校区にもインターチェンジがあるじゃない。」と思えるように、先に学習する計画にした。

坂出市の様子については、大まかに、次のようにとらえていくことができる。

- ・ 北部には、工場が多い。
- ・ 東部には、緑が多い。
- ・ 西部には、市街地がある。
- ・ 南部には、山がある。

地図は、毎時間、活用していく、その際、中国地方、四国地方とのつながり、県内の近くの市や町とのつながりの両方、それぞれを意識できるような地図、さらに、矢印を用い、重要なポイントをクローズアップした地図の有効性等についても話し合われた。

市長の話にもあったように、フルインターチェンジをホットな現代的課題と考えているということも確認された。

2 ご指導 西部教育事務所 林 聖士 先生

坂出小学校は、JRの線路がすぐそばを通り、児童も「交通の要衝」であると感じ易い環境にある。交通については、市民の課題であるとともに、児童にとっても学びにできるのではと感じた。問題解決的な授業の流れ、見方、考え方、児童が自分の考えを説明する経験がたいへん大切である。フルインターチェンジ化について、授業や、資料を通して理解を深めることができた。意識の流れについて、授業者、児童のどちらが主体になっているか考えていくことも大切である。

見方、考え方について、それぞれの教科の眼鏡で見してみる。その上で、重要な内容にスポットライトを当てたり、精選したりすることも大切である。

<香社研テーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を教科等の横断的な視点から編成し、実践する学習で～

<高松市社研テーマ>

問題解決的実践学習による深い学びの探究

～学びの3層過程の実践強化による資質・能力の育成～

9 月定例会 高松支部

日時：平成 30 年 9 月 1 日（土） 附属高松小学校

○研究部提案 提案者：高松市立十河小学校 鶴羽 美緒 先生

○実践提案 提案者：高松市立十河小学校 藤澤 大地 先生

高野 雅信 先生

妻鹿 恭介 先生

単元名：第 4 学年 地域の安全を守る消防署の働き

1 研究部提案

研究の重点として以下の 3 点について提案が行われた。

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向け、深い学びの視点から探究

単元や題材のまとまりの中で主体的・対話的で深い学びが実現する。

単元構成の図をもとに調べたいことを焦点化し、単元の山場でさらに追及すべき深まった課題を設定している。深まった課題は子どもの主体性と教師の意図性のいいバランスで生まれる。

(2) 問題解決的実践学習の学びの 3 層過程の実践強化

(3) カリキュラム・マネジメントとしての学習評価、授業評価演習の研究

自己評価カードによる振り返り、PDCA サイクルによる授業改善

2 実践提案

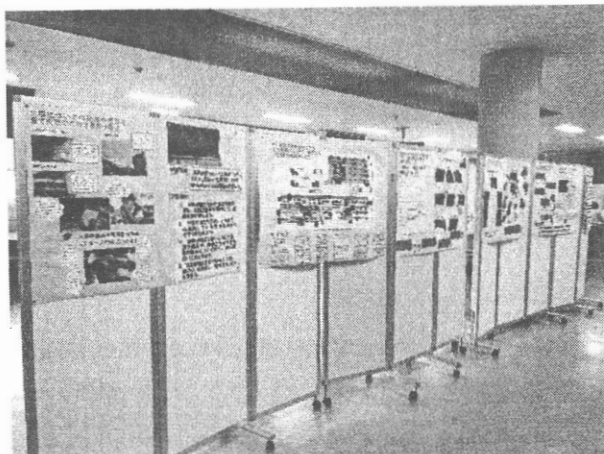
(1) 新学習指導要領の内容分析

第 3 学年において火災と事故の防止を取り上げる。その際、緊急時に対処する体制をとっていること、協力して防止に努めていることを理解させ、また、第 4 学年においては風水害・地震（自然災害）などを取り扱うこととなった。

(2) 教材の内容分析

深い学びをめざした教材の選定をめざした。今回は本年度 5 月に運用が開始された高松市防災合同庁舎を扱う

こととした。災害対策本部を常設し、有事の際には 24 時間体制で迅速かつ的確な対応ができるようになった。そこで、深まった課題として通信指令室が防災合同調査に移したわけを考えた。児童の意識のずれが生まれたり、少しでも多くの命を救いたい関係者の思いにふれることができたりするよさがある。



(3) 問題解決的実践学習における学びの3層過程

問題を持ち、見通しをもつ段階・・・火事の恐ろしさについて調べて学習問題をつくる。

調べ、考え、表現し、まとめる段階・・・山田出張所を見学し、分かったことを新聞にまとめる。

火事の時にどのように対応しているのか分かりやすくまとめよう。

通信指令室が消防署のない防災合同庁舎に移ったのはなぜか考える。

(深まった課題)

十河の消防団から火事予防のための地域の取り組みについて学ぶ。

つなぐ段階・・・・・・・・・・学んだことを防災新聞にまとめ、保護者や地域に発信する。

(4) 本時の思考について

本時で防災合同庁舎を扱う→防災合同庁舎って？どうして通信指令室が移ったの？という疑問をもつ。

今までの周辺地図と今の周辺地図を仕組み図に表し、比較した。

意識のずれが生じる場面 巨額の費用が掛かる(「えー」)

現場にかける時間はほとんど変わらない(「意味ないやん」)

なんでわざわざつくった？という意識になった。

そこで防災合同調査と高松市役所のボードを使い、災害対策本部室に集まる人の動きを視覚的に表す。

今までよりも早く集まることができることを確かめられた。

成果：調べたいという意欲をもって調べることができた。

3年生での学習が4年生での自然災害の学習につながる視点をもてた。

課題：防災合同庁舎と市役所のみでの操作だったので、地図との比較で周辺機関もかわりがあることに気付かせたかった。

3 討議内容

○自助・公助・共助をどのあたりまで教えたらいいか。

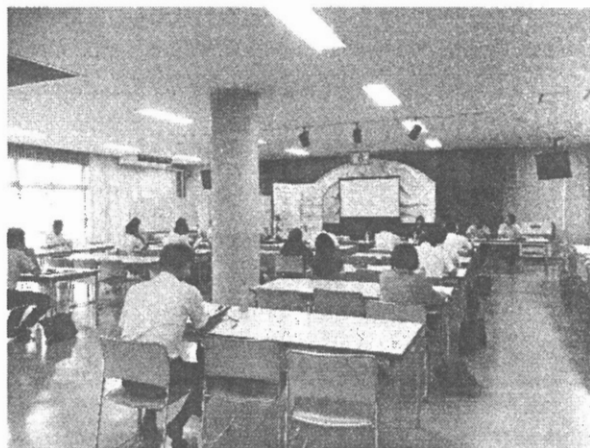
本時どこを大切にしたいかを考えると、防災合同庁舎を扱い公助や共助を中心の単元構成を行った。

自分たちにはどのように行動していくかというところが社会参画の意識につながるが、小学校の段階でどこまでおさえるかが難しい。火事が起きる前後の時間の経過を捉えながら自助や公助・共助に触れていく。

○どのあたりまで自分たちの生活できることを考えたのか。

考えたいという前の子どもの意識がどうであったか。自助についての意識が薄かった。

○「合同庁舎に移ったのはなぜか考えよう」という深まった課題を来年の3年生にはどのように変えていくかが課題になる。たまたま今年度タイムリーな話題として実践できた。3年生の実態にも合わせないといけないのでは。



4 ご指導 高松市総合教育センター 指導主事 河田 祥司 先生

新学習指導要領総則編に「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら」主体的・対話的で深い学びを実現していく必要がある。そのために、子どもの姿がどうあるべきかを考える必要がある。授業前の子どもの姿を見ると学級の雰囲気や子どもの人間関係が見られる。大切なのは、教師のちょっとした対応や子どもの発言を具体的に分析して、議論していくべき。子どもが主体となる学び手になるための言葉かけを積み重ねていくことも大切。

香社研だより 丸亀

香社研テーマ

「現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科教育」

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を、

教科等横断的な視点から編成し実践する学習で～

丸社研テーマ

自立と共生を育む社会科学習

9月定例会 丸亀集会 平成30年9月29日(土) 於: 丸亀市立城東小学校

＜実践提案＞ 丸亀市立城乾小学校 小西 崇夫 先生

4年「住みよい暮らしをつくる (水はどこから～ごみのしゅりと利用)」

1 主張点

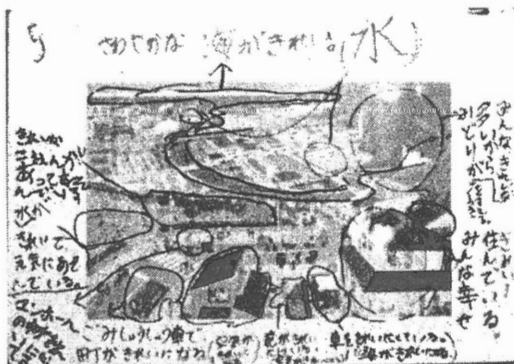
児童一人ひとりが課題解決に向かって主体的に追究できるよう、社会的事象との出会わせ方を工夫し、人との関わりを中心とした体験的な活動を学習過程に効果的に取り入れることで、社会事象の意味を考え、学び合う楽しさを感じ得る授業を展開する。

2 本単元での取組

(1) 児童が主体的に学習課題をつくり出すための単元導入の工夫

問題を身近なものとしてとらえ、「丸亀市」「家のまわり」など、地域の写真と一般的な教科書の資料を行き来しながら考えさせた。教科書のイラストは、本時の終末には自分たちの住む城乾小学校区の航空写真に置き換え、単元の終わりまで掲示し続けた。

単元の導入時に私たちの「健康で住みよい暮らし」を支えるものは何か、資料を読み取る時間を十分に確保した。グループでイラストの中から見つける活動中、本単元の学習に関連するキーワードが出てきた。



(2) 社会事象の理解を深めるための工夫

①連続した問いにより児童の追究意欲が継続する(児童の疑問を大切に単元の展開)

誰かのつぶやきによって授業が展開することを意識した。最初は曖昧なつぶやきが学習問題をつくるもとになったり、課題が解決した後の新たな疑問になったりする。一人の児童のこだわりを共有することで、学習を広げたり、深めたりする原動力になっている。最初は予想と違う結果から落胆していた児童が、次時の活動でその予想が的中する喜びを感じることもあった。

②グループでの話し合い学習を中心とした学び合い活動を関連させた学習展開

自分たちの考えを交流しながら、広げたり、高めたりするグループ学習の時間を大切にしている。その際には、ホワイトボードを使っている。児童たちはすぐに使いこなすようになった。資料にコメントを書き込めること、すぐ書いて、すぐ消せることが積極性を引き出し、失敗を恐れる雰囲気を無くしていった。



③これからの水道事業の課題を単元化する（香川県広域水道企業団，下水道）

児童が「高松と丸亀の水を交換することはないのかな？」という疑問を発した。交換することはできないが，県内の市町が足並みを揃えて，平成30年度4月1日から事業を開始している香川県広域水道企業団を単元に組み込んだ。全国に先駆けた取組であり，10年後の料金改定など，これから先に起こる問題点を解決するたまでであることを学んだ。

また，丸亀市では下水道敷設区域だがなかなか，下水道が浸透していない現状がある。施設も老朽化し，2年後には新たな下水処理場建設に取り組むことも紹介した。

現在，市民の抱える課題を考えることは，社会参画への意欲付けにもなると考えた。

（3）社会参画へつながる意欲と態度をもたせるための工夫

①振り返りを他者に向けての発信につなぐ

学習した内容，現状の課題点を自分たちの知識として終わらせるのではなく，まずは家族と共有し，できれば地域の方へも発信し，自分たちも市民の一人であると自覚を持たせたい。新聞・ポスターにまとめ，校内やコミュニティセンターに掲示したり，学校ブログにアップしたりして活用した。

②社会のできごとに関心を向け自分のこととして受け取るアンテナ

7月～8月の岡山県真備町や愛媛県大洲市の豪雨での被害状況を話す中で，「浄水場が被害を受けている。水が届かないなんて不便だ。いつ直るのだろう。」「給水車が出動している。」など他人事ではないことを何度も振り返った。

9月には，北海道胆振東部地震での厚真町のライフラインの寸断で，困る人々を目の当たりにした。

3 討議内容

- ・震災の写真は，児童に新たな視点を与える良いきっかけになる。震災の写真を単元の初めに示して，健康で住みよく「ない」暮らしを考えさせても良いのではないか。
- ・まなボードを使うことで，子供の言葉で丸亀の水のしくみを語らせたのが良かった。
- ・水の生活経験をもとに，水について課題を持たせるために，単元導入で水に特化するのも良い。
- ・「自己の問題」とは，この単元では何だったのか。大単元の課題やゴールは何だったのか。
- ・良い素材，資料が多くあった。素材のどこを，何を生かすのかの吟味が必要。

4 ご指導

高松市教育センター指導主事 河田 祥司 先生

- イラストの良さ**・読み取りやすく，発見が多い。（考えの数が増える。技能の習得につながる。）
・他の内容につなぐことができる。



イラストでイメージを広げ，写真で自分ごとにしていく。

写真の良さ

- ・現実的で，自分ごととなりやすい。
- ・驚きや葛藤が生まれやすい。（子どもの問いから課題の設定へ）

主張点について

- ・ポスター作製に向けて，目的や使命感を単元の初めに持たせる。
- ・ごみと下水が選択式になっているが，下水は循環を意識した学習ができる。
- ・第4学年の学習内容は，教科横断的な内容が多い。
- ・丸社研の研究が，香社研の研究テーマに即したものになっているか。

香社研だより

高松市社研

発行者 香川県小学校社会科教育研究会
香川県小学校教育研究会社会科部会
会長 亀井 伸治
発行日 平成 31 年 3 月 29 日

<香社研テーマ>

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学習
～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を教科等の横断的な視点から編成し、実践する学習で～

<高松市社研テーマ>

問題解決的実践学習による深い学びの探究
～学びの3層過程の実践強化による資質・能力の育成～

10月定例会 高松支部

日時：平成 30 年 10 月 6 日（土） 附属高松小学校

○授業提案 提案者：高松市立十河小学校 藤澤 大地 先生

高松市立国分寺南部小学校 高木 浩彰 先生

高松市立高松第一小学校 中西 清美 先生

単元名：第4学年 自然災害からくらしを守る ～防災に対する意識の高まりを目指して～

1 授業提案

(1) 新学習指導要領の内容分析

新指導要領では、第3学年で火災、第4学年で風水害、地震を取り扱う。現行の指導要領に比べ、学年ごとで取り扱う内容が明示されるようになった。本単元は、4年生での新設単元である。また、第4学年と第5学年での内容で、どちらも自然災害を取り扱うが、第4学年では「地域社会」、第5学年では「国土の地理的環境」を理解することが中心となっている。

本単元で育てたい資質・能力には以下のような事柄が挙げられる。

- ・ 【何ができるようになるか】防災に対する高い意識、自分たちにできることを選択・判断する力
- ・ 【何を学ぶか】関係機関や人々の対処など
- ・ 【どのように学ぶか】聞き取り調査や資料で調べ、関係機関の働きや災害による地域の被害を少なくする方法を考える

(2) 教材の内容分析

平成 16 年（2004 年）の台風 16 号による被害を取り扱った。この台風被害を扱ったのには、「①児童の住む地域も含めた高松市も高潮などで大きな被害を受けたこと。」「②聞き取り調査が可能なこと。」「③県庁や市役所などの行政の働きを捉えることができること。」といった理由がある。

(3) 県、市の研究とのつながりについて

県の研究「現代的な課題」という点には「台風などの災害は、これからもくる可能性がある」といった点で、現代的な課題として捉えやすいと考える。また「教科等横断的な視点」という点では、高松第一小学校での「総合的な学習の時間（内容：まちの安心・安全を伝えよう）」で平成 16 年の台風 16 号の被害を取り上げて社会科の本単元と関連させている。

市の研究という点では、〔深い学び〕に関しては、子どもの主体性、教師の意図性がうまくバランスのとれたところをねらう。〔実践強化〕に関しては、見通しを持ち、単元を貫く学習問題をつくる。そして学習の中で習得した学びから、深まった課題を社会参画にどうつなぐかということを考える。〔学習評価、授業評価演習〕に関しては、成果と課題を明確に、PDCA サイクルを大切に授業研究を行う。

(4) 学びの3層課程による単元構造

問題を持ち、見通しを持つ段階・・・〔総合的な学習の時間〕においても扱う。

平成 16 年の台風被害について、当時の写真や新聞、インタビューなどをもとに調べる。現在、被害が少なくなったのはどうしてか。調べ、考え、表現し、まとめる段階・・・関係行政機関や自主防災会の方々へのインタビューや資料から防災対策の変遷について知る。

被害、対応、問題点を色付箋紙に分類して整理する。

今年の岡山県真備町の豪雨被害で、対策していたのに被害が出たのはなぜだろうか。また、被害が少なかったところもあったのは、何が良かったのだろうか。(本時)

つなぐ段階・・・・・・・・・・国語科の単元「わたしの考えたこと」と関連して、意見文を書く。

(5) 本時の思考について

今年は多くの地域で豪雨による被害が起こった。→防災対策が生かされなかったのはなぜか考えた。避難が遅れたのには、防災アプリなどが届かなかった人もいないかといった意見などが出た。真備町の中に、犠牲者がゼロであった服部地区がある。→どうして犠牲者がゼロになったの？

地域の人々が一人一人に声をかけていくなど、共助や自助の力があつた。

犠牲者がゼロになるには、公の防災対策に加えて、地域の人々の協力やつながり、一人一人の気持ちや行動にもあることに気づかせた。

自分たちの町で犠牲者をゼロにするために、最も大切にしたいことを意見文にしよう。

成果：過去の事例から、被害の実情や対策の変遷など、付箋紙に分類しながら見つけることができた。

本単元の学習を通して、風水害から身を守るために大切なのは自助と共助であり、地域の人々の意識であることに気づかせることで、市や地域に発信しようという意欲が高まった。

課題：児童は、本時、現在の防災対策の不十分な点を客観的に考えていたので、もっと犠牲者ゼロの重みについてふれる必要があつた。

今まで学んできた事実を、自分の考えの根拠や理由の中にうまく入れることができなかった。

2 討議内容

○単元を通した学習のはじめに「意見文を書こう」という課題は、どのように出てきたのか。

総合的な学習で、平成 16 年や平成 23 年の台風被害などについて学習していた。単元のスタートの時点では、被害に関する大まかな知識を持っていた。また自分が思っていた以上に災害が大きかったということから、このままじゃいかん、どうにかできないかという意識が子どもたちにあつた。どうにかしてほしいという意識から意見文（発信）になった。

○現代的な課題を見つけるということが、先生のねらわれている一つだとすると、その目指す力は災害に対する意識と行動力という点も挙げられる。子どもたちは将来どこに住むかは分からないが、自分が災害に対してどう向き合っていくか、自分がどういったことを知っておく必要があるかなど、本質的な「意識」を養う上で成果も挙げられたように思う。

3 ご指導 高松市総合教育センター 指導主事 河田 祥司 先生

今回の授業には、時間的な視点として、過去の資料を用いた調べの記録が掲示されており、学習してきたことを積み重ねて考えることができていた。また、政治的な視点として、市の危機管理課の人の話などもあつたが、「国から依頼されて自衛隊が動いている」という点で大きな動きがあつたことも学習の記録に残っていた。

子どもに選択させる場面で押さえておきたい 3 つのポイントがある。「①子ども自身が選択できる状態にあるか」「②選択させる上で、情報はきちんと整理されているか」「③選択した上で、根拠を述べられる状態になっているか」。こういったことをしておかないと、本当の意味での力はついていかない。

香社研だより さ・東,小豆

現代的な課題に対応する資質・能力を育てる社会科学学習

～「社会に開かれた教育課程」の中での社会科を、教科横断的な視点から編成し実践する学習～

<香社研テーマ>

<さ・東社研テーマ>

思考力の育成をめざした学習プランの開発

～子どもが問いをつくり・深め・広げる授業の在り方～

<小豆社研テーマ>

社会認識を深め、社会とつながる資質・能力を育てる社会科学学習

1 提案の主張点

11月定例会 さ・東,小豆ブロック集会

日時 平成30年11月10日(土) 於:香川大学教育学部附属高松小学校 ランチルーム

実践提案1 第4学年 「水はどこから」の実践から

提案者 さぬき市立志度小学校 教諭 山下 雄基先生

実践提案2 第6学年 「3人の武将」と「日本の近代化への歩み」～討論型学習の推進～

提案者 土庄町立土庄小学校 講師 上嶋 光晴先生

実践提案① さ・東社研

- (1) 子どもが問いをつくり、深め、広げる学習を単元全体と毎時間の授業で構築することによって、子どもの探求意識が途切れないようになり、連続した思考力の育成を図る学習が行えるであろう。
 - ① 子どもたちが問いを作る工夫
追究への意欲を持続するために、問いを児童自らが生み出すよう設定する。児童がどのような場合に知的好奇心をもつのかよく吟味する。そして、児童が体験などにより自分の生活の場の掘り起こしをしたり、目の前の社会事象と体験や既習経験とをつないだりすることで、その中に矛盾や共通点を見いだせるように支援し、単元を通した視点での学習問題になるようにする。
 - ② 課題解決の見通しをもち、主体的に学習を進めていくための表現の工夫
問いを解決し再構成することで、深まった課題意識につなげる。教科書で習得、地位教材で活用を図るなど指導計画を工夫して問いの追究を図る。社会的な見方・考え方を通して、対話的な学びの場を取り入れながら課題解決したことを表現物に表していく。連続性、必然性があり、深まりのある課題に導く。
 - ③ 社会に見られる現代的課題に対する関わり方を選択・判断する学習課題の工夫
深まった課題の解決を通して、「社会に見られる現代的課題」を見出す。課題に対する関わり方を選択・判断する学習課題を設定する。学んだ事柄をもとに社会の一員としての自覚を生み出し、社会参画へつなぐ課題意識をもてるようにする。
- (2) 若手教員とベテラン教員が協働して研究を進めることによって、これまでの研究の継承と今後の発展を図ることができるであろう。
 - ① 授業の微細技術を継承するために、模擬授業形式で事前検討会を行う。ベテランが教師役を担い、参加した若手教員が技術を直接見聞できるようにする。
 - ② 授業実践とともに、今後の研究を発展させるために事後検討会を開く。

実践提案② 小豆社研

(1) 歴史上の人物の業績や思いなどをグループや全体交流の場で話したり聞いたりすることによって、主体的・協働的に学ぶことができ、「ミニ論文」を作成するなどの言語活動を実践することによって、より深い学びが期待できるであろう。

① 単元の中心的な人物数名について、1人選んで3つ程度の視点から個人でまとめる。調べる際には、教科書や資料集の他に教師側で独自の資料集を用意する。

② 人物ごとでグループを編成し、個人まとめて取り上げた視点ごとにグループでまとめる。その際、児童自身の当該人物への思いや考えを併記する。

③ 各グループでまとめた内容を追加・訂正を加えた後、学級で全体交流を行い、個人でミニ論文を書く。

(2) 史的事象を多面的にとらえ、自らの考えを重ねて生活とつなぐことで、歴史学習における社会参画のための基礎的資質を育てることができるであろう。

ミニ論文をもとに学級全体で交流する。歴史的事実を受け止めるだけでなく、児童自身の言葉で事実に対する賛否を問う活動も行う。

2 討議内容

実践提案① さ・東社研

- ・問いを作るという活動・段階を重視するなら、「地域に貢献した人を紹介しよう」という部分にも問いを用意して、学校外の水の流れ調べるようにしたい。
- ・現代的な課題の解決に向けた学習になるよう、深まった課題は子どもたちが「持続可能な社会にするために取り組めるように」設定するようにしたい。
- ・水の流れのサイクル図には、節水以外にも下水のことを含めた環境保全に関わることも入れるとよい。

実践提案② 小豆社研

Q. オリジナル資料の作成は、どのように行ったのか。

A. 原典資料をそのまま提示しても子どもには分かりにくいところもある。歴史上の人物をより身近に感じられるように、自分の今までの経験も加味しながらA4判2～3枚にまとめた。教科書や一般的資料にない逸話で学習意欲を高められるようにした。

Q. 討論を通して、学習がどのように深まったのか。

A. 道徳的側面をふまえて、歴史上の人物の生き様から人間性を学ぶことが深い学びにつながる。最終的なまとめの部分には、授業中の一連の流れで思考した子どもの意見をもってくる。

3 ご指導

さぬき市立さぬき北小学校 教頭 亀井 健男教頭先生

実践提案① さ・東社研

- ・「問い」は受動的な「疑問」とは異なり、主体的な調べに向かう起点となるもの。調べてすぐに分からないことは、追加調べや資料検証などを繰り返すことで、調べて表現する（まとめる）ことを新たに積み上げていく。
- ・授業での対話的学び（討論）は、教員の研修会における質疑応答と同じ型と考えられる。相手の内容を受け、立場や根拠を明確に論理的に話すことが大切で、実践の繰り返しによって慣れて身に付いていく。また、書いたことは丁寧に分析することが大事である。
- ・学習問題は、児童の理解度や習得・判断の違いから、無理に1つでなく個に応じて複数あってもよい。

実践提案② 小豆社研

- ・教育課程、学校教育目標の具現化に向けて、指導要領総則に沿った学校教育活動や社会科学習を実践することが肝要である。その際に、地域の実態にも合わせながら、必要な資質・能力とは何かを考える必要がある。
- ・予測困難な社会で現代的課題の解決が図れる児童を育てることが重要。そのために、様々な人物の生き様にふれ、表現と対にして思考を深めること、実生活や実社会に役立つような行動をとれる力を育てていかなければならない。

香社研研究フォーラム2018について

1 目的

- ・ 今年度の各郡市の取組や成果と課題について、発表や意見を交流することを通して、研究をさらに深めると共に、次年度以降の研究につなぐことができるようにする。
- ・ 社会科教員、香社研の会員だけでなく、社会科に興味のある他教科の会員、学生などの県下の教育関係者にも広く案内をし、本県の社会科研究について知ってもらうとともに、今後の県内の社会科教育のより一層の発展を目指す。

2 日時

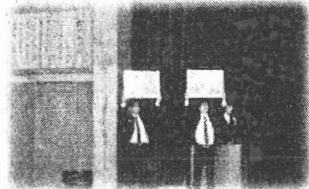
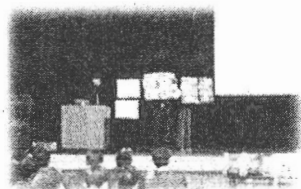
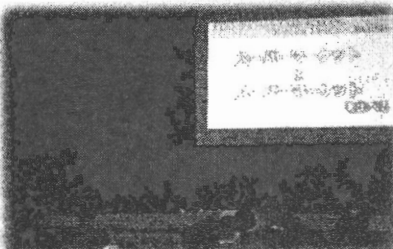
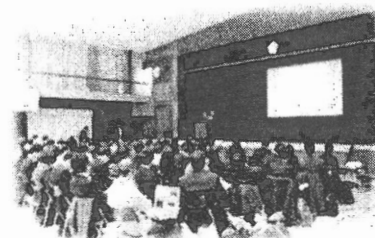
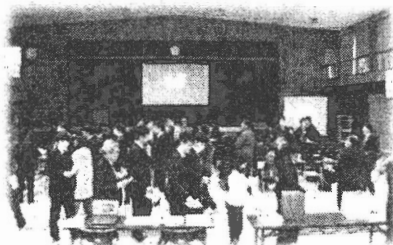
平成31年2月23日(土) 12:45~17:00

3 場所 香川大学教育学部附属高松小学校 体育館

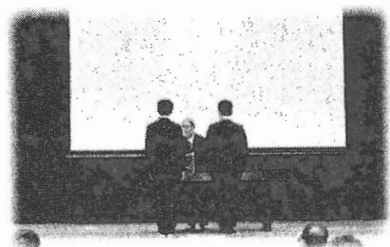
4 当日の様子について

今年度も県下の香社研会員だけでなく、他教科を専門とされている先生方も含め、約100名の参加者と共に、実践交流ができたことを、嬉しく思います。また、今年度は、初の試みとして県の河川砂防課、環境政策課から資料配布や、模型の紹介、環境学習指導案集の案内なども行われました。それぞれの郡市が、こだわったこの1年間の研究のまとめです。今年度

は、子どもの姿が見えるような実践発表が数多く見られ、具体的に子どもの資質・能力が養われている様子がイメージできる発表が多く見られました。



フォーラムカップならではの各郡市の特色を生かした、協力した発表の様子も、多くの郡市の発表で見られました。協力者の皆さんありがとうございました。



今年度のゴールドカップは、高松市社研、
シルバーカップは、三・観社研の提案発表でした。
提案してくださった各郡市の皆様、そして、本カップに参加して
くださった皆様、本当にお世話になりました。

